

会は72年9月22日に成立し、委員長永田武(東大理)、幹事(ex officio)に鈴木次郎(東北大理・学術会議)と八木健三(北大理・学術会議)、庶務幹事に福島直(東大理)の各氏を選出した。これに伴い、UMP部会は自然消滅し、GDP小委もこれと同時に消滅したことになる。従来はUMP部会GDP小委が対外的に日本のGDPのNational Committeeとして存在したが、今後GDP分科会がこの任にあたることになる。GDP分科会はその下に、はじめに書いた3本の柱と、国際協力の4つの小委員会を設置することになっている。

国際地球観測特別委員会 GDP分科会のメンバーはつぎの通り(敬称略、*印はGDP実施世話人会メンバー)。力武常次*(分科会主任、東大震研)、小林和男*(分科会幹事、東大海洋研)、鈴木次郎*、秋本俊一*(東大物性研)、浅田敏*(東大理)、猪木幸男*(地調)、黒田吉益*(東教大理)、松井義人*(岡山大温研)、村内必典*(科学博物館)、奈須紀幸*(東大海洋研)、安井正*(気象大学校)、永田武、川上喜代志(水路部長)、井上英二(国土地理院)、八木健三(北大理)、藤田至則(東教大理)、今井一郎(気象研所長)、菱田耕造(気象庁)、柳原一夫(気象庁)(松井義人記)

昭和48年度東京大学海洋研究所 共同利用研究の公募について

1. 応募資格

国、公、私立大学その他の研究機関の研究者ならびにこれに準ずる者で、海洋の基礎的研究を目的とするもの

2. 共同利用研究の種別(申込・連絡期限)

(1) 研究船の利用研究(申込期限11月30日)

(A) 白鳳丸運航計画

海 域	期 間	日数	主な分野
本 州 南 方	5.14~6.7	25	物 理
西 太 平 洋 (GDP)	7.5~9.25	83	地物・地質
九 州 西 方	11.21~12.18	28	水 産
北太平洋西部	49年 1.18~3.22	64	物 理
亜熱帯海域			

(B) 淡青丸、主に近海の研究航海に就航

(C) 申込書類

(i) 研究船利用申込書 1

(ii) 承諾書 1

(i) 略歴書

1

(2) 外来研究員(連絡期限11月30日)

所外の研究者が海洋研に滞在して研究を行なう便宜を提供することを目的とする。あらかじめ、関係の深いと考えられる部門の担当者と連絡し、研究テーマ、滞在予定期間、必要経費、その他希望事項について打合わせて下さい。

(3) 研究会の開催(連絡期限11月30日)

比較的多人数の1・2日間のシンポジウム、または比較的小人数の研究者による数日間の討論集会などが考えられている。関連部門の担当者と連絡し、研究会の名称、提案理由、開催希望月日、参加予定者数、その他希望事項について打合わせて下さい。

3. 申込期限

(1) 研究船利用 昭和47年11月30日

(2) 研究会ならび外来研究員

(i) 連絡期限 昭和47年11月30日

(ii) 申込期限 昭和47年12月28日

4. 申込先 〒164 東京都中野区南台1-15-1

東京大学海洋研究所共同利用掛

TEL. 東京 (03)-376-1251

各書類は、海洋研究所所定のものを使用のため、必要部数を請求して下さい。

5. 採否の決定 昭和48年2月上旬

来 年 の 学 会 予 告

- 1973年度地球化学討論会は1973年秋、秋田大学で行なわれます。
- 1973年4月3日~5日、地質学会が東北大学で開催されます。
- 1973年度秋季火山学会は鹿児島県の予定です。

学会事務所 (166) 東京都杉並区高円寺北4-35-8
気象研究所 地球化学研究部
電話 (03) 337-1111 内線 75
振替口座 東京 38679
日 本 地 球 化 学 会

ニ ュ ー ス (213) 川崎市高津区久本135
発 行 所 地質調査所 地球化学課
電話 (044) 86-3171
(編集担当) 倉沢 一・本島 公司
(年5回発行予定)

日本地球化学会 ニュース

No. 63

1973. I. 15

1973年地球化学討論会の予定

場所 秋田大学

世話人連絡先 〒010 秋田市手形学園町1-1

期日 昭和48年10月1日(月)~3日(水)

秋田大学教育学部地学教室

内容 課題討論、一般討論、(エクスカッションあり)

椎川 誠

課題討論 1. 黒鉱鉱床の地球化学

電話 0188-33-5261

2. 有機性鉱床の地球化学

詳細は4月頃配布予定の本誌でお知らせ致します。

招待講演のみ

1972年地球化学討論会報告

昭47. 12. 9

斎藤一夫、一国雅巳

日時 昭和47年9月11日(月)~13日(水)

場所 仙台市宮城教育大学 3会場

出席 延約700人(分析化学会との共通セッションを含む)

登録 222名(内学生42名)

講演 110件

課題討論 1. 有機地球化学の分析化学的諸問題
(日本分析化学会との共通セッション)
講演5件

2. 親銅元素の沈殿過程 講演6件

懇親会 9月12日(火) 仙台共済会館

出席者 102名

(会費1500円)

遠足 9月14, 15日 水沢市および三陸町

参加人員 22名

決 算

収入 485,300円

内訳 { 登 録 料 102,600円
要 旨 代 302,700円
学 会 より 80,000円

支出 476,800円
内訳 { 印 刷 費 170,000円
通 信 費 45,000円
会 場 費 60,000円
人 件 費 90,000円
文 具 代 20,000円
準 備 費 85,000円
雑 費 6,800円
差引残 8,500円
(次期開催地に申し送り)

「生物性炭酸塩殻の生成」に関する シンポジウムの報告

昨1972年12月11~13日の3日間、東京大学海洋研究所施設共同利用研究会「生物性炭酸殻の生成に関するシンポジウム」(海洋無機化学部門 坪田博行教授)が開かれた。

生体内における炭酸塩の生成、礁の生成、炭酸塩堆積物とその変質、とそれぞれの段階における生物、地質、化学の各分野の諸問題が取り上げられ、活発な討論が展開された。

生物性炭酸塩については、各分野との境界領域を埋めていく必要があり、今回の研究会は北野康教授(名大)

の御努力もあって非常に広範な分野の研究者 100 名余が参加し、討論時間を充分にとったにもかかわらずなお意見の続出、時間切れの問題も多くみられた。今後もこのような各分野の研究者が積極的に交流できる場を多く望みたいものである。(藤貫 正)

IAVCEI (火山学地球内部化学会) シンポジウムについて

International Symposium on Volcanism and Associated Metallogenesis というシンポジウムが、1973 年 9 月 3 日—8 日にルーマニアのブカレストで開催されます。

以下にサーキュラーの要約を掲げます。

主催 IAVCEI

支援 International Federation of Societies of Economic Geology およびそれを構成する 3 つの学会 (SEG, IAGOD, IAAG)

組織 鉱山・石油および地質省、教育省がオルガナイズする

内容 火山、火山活動に関する問題を地質学的に、地球物理学的に、地球化学的に扱ったもの。

次のような内容は特に興味をもたれよう。

orogenic stage 末期の火山活動、火山地域の鉱液の起源、鉱床の構造規制、鉱床や火山岩の熱水変質についての地球化学、火山現象に伴う鉱床の同位体研究、その他。

旅行 エクスカーションは 6—7 日の日程で、3 つが計画されている。

連絡 Secretary General の Prof. Dan Radulescu, Facultatea de Geologie-Geografie, Bul. Balcescu 1, Bucuresti, Romania へ

(倉沢 一・本島公司)

書 評

湖水・海水の分析

小山忠四郎、半田暢彦、杉村行勇共著、294 頁、講談社、2,000 円 (1972)

近年環境試料の化学分析に対する社会的な要請が急激に増大してきたが、分析手段の進歩にくらべて、分析試料の採取と前処理についての研究や整理は、どちらかといえば、各人の経験にまかされており、まとまったものが少なかった。フィールドワークシリーズの意図すると

ころは、この試料採取法と分析の前処理に重点をおいて記述し、現場の技術者の手助けになるようにしたものである。

本書は、シリーズ水編の 1 つで、水質の正しい把握のために、著者らがこれまで案出してきた方法に重点をおきながら、最近の進歩をとり入れて記述されたもので、著者らは、いづれも、陸水化学および海洋化学の第一線の研究者である。

内容は 2 編に分れており、第 1 編は、小山、半田氏が、また第 2 編は杉村氏が分担執筆している。

第 1 編は湖水の分析で、試水、懸濁物、新生堆積物および湖底堆積物の順に試料の採取法と保存法が述べられており、次にそれらの試料に含有されるガス成分、無機および有機成分の分析法が記載されている。夫々の項に実際に試料を分析した場合の結果があげられており、読者に予備知識を与えようとしているのが便利である。著者が従来行ってきた方法の集大成であって、現場でたしかめられており、新しく野外調査を計画する場合によい手引きとなるであろう。

しかし、人間活動による湖水の水質の変化の現状、調査計画立案のための項がこれに加えられていれば更に親切であったと考えられる。

第 2 編は、海水の分析であり、はじめに海水の分析が我々の生活にいかにかかわっているかを多くの図、表をあげて概説しており、更に、調査計画立案のための問題点がまとめられている。次に、試料の採取法、採取試料を、目的とする分析にもっていくための適切な前処理の方法と問題点が要領よくまとめてある。最後に、無機および有機成分を試料から検出定量する方法について、分析の実際的な操作は成書にゆづり、濃縮法と分離法に焦点をしばって記載してある。

各項目の導入部に概説がされ、分析の意義や目的がべられ、よく整理されている。

海底堆積物の採取・分析法と、海水から生物への連鎖を考える場合に重要な懸濁物、プランクトンなどの前処理についても記載があったならば、更に読者のためには便利であったと考えられる。

湖水、海水の分析に関するこの種の出版物が従来少なかっただけに、現場技術者だけでなく、研究者、大学院学生にも一読をすすめたい好著である。

(気象研 猿橋勝子)

書 評

新訂 無機化学摘要

柴田雄次、山崎一雄共著、402 頁、1,500 円 南江堂 (1972)

大正 15 年の初版以来、37 版 (改稿新版) というロングセラーの好著である。ほとんどの会員が無機化学の教科書として使った経験があるのではなかろうか。

この新訂版は、内容の画期的な更新をはかったもので、希ガスの化合物を詳細に記載し、ゲルマニウムの説明も詳しく行なわれている。希土類元素は全面的に書き改められ、週期表の順序に従い、クロム族を、バナシウム族とマンガン族の間に移してある。地球化学の章は全く更新され、最近の進歩をもちこむと共に、この応用として深い関連をもつ大気や水の汚染を取り上げている。

その他小改訂は、全部の章にわたっている。従来事項索引中にあった外国語は除かれているが、これは、今日では外国術語を本書中に示す必要を認めないからであるという。このほか、巻末付録中の無機化合物命名法に説明を加えたり、各種の数値を最近のものに改めたりしている。

しいていえば、安定同位体の表があるのに、放射性同位体の表をのせないのは、片手おちのような気がするし、超ウラン元素についても、もう少し化学的性質を詳しく記載してあれば便利であろう。

参考書が巻のはじめにまとめられているが、全体としてよく分野をカバーしており、くわしく調べようとする学部学生のためには便利である。しかし超ウラン元素系の文献が少なく、たとえば、カットツ、シーボーグ著；三宅ほか訳、アクチニドの化学、朝倉書店などをあげれば、更に親切ではなかろうか。

ともあれ、本書の近代化が次々と進められていることは、本書を教科書として使用する大学化学学生のために望ましいことで、長く好伴侶となるであろう。

(気象研 杉村行勇)

書 評

雨水の分析

角皆静男著、フィールドワークシリーズ、講談社、121 頁、900 円 (1972)

わが国における降水の観測研究は、はじめ農学関係者が天与の肥料成分の供給量を知るために行なわれたよう

であるが、理学的見地からの研究分野は、三宅、菅原両先生によって開拓された。1950 年代の後半以降、放射能雨の研究がさかんになり、新たな観点から降水現象が眺められることとなった。その後、安定同位体や天然放射性核種も観測要目に加わって、現象面が多彩となった。本書の著者は、これらの観測要目をういて降水化学を推し進めている研究者の一人である。本書は、この著者の体験を通じて、試料採取、前処理、分析法を一通り概説したものである。狙いは、化学分析そのものよりも分析に持ち込むまでの扱い方や研究を推進させるに当たっての基本的な考え方にあると思われる。

降水分析の目的には、地球化学的サイクルの追究、気象学的見地からする降水現象の究明、環境汚染監視などが考えられるが、いずれにしても、化学分析にけるまでの取扱いには軽視できない。本書のような手引書の出現は有難い。

読み終って感じたことを二、三述べる。1 章は、降水の研究を進めてゆく上で参考となるとと思われる、基礎的な知見について述べているが、ここで、冒頭に平均滞留時間が出てきて、いささか面喰う。これは、この章の終りにもっていった方が判りやすいのではないかと思う。第 2 章の一般的注意の中で、平均濃度としては、加重平均を用いるべきだが、ウオッシュアウトで除かれる成分には適さない、と書いてある。この点は同意できない。雨水を採取する場合は、小は雨滴一ケから大は数 100 μ に至るまで、物質の混入経路の如何を問わず、濃度として得るものは、一成分の存在量を水量で除したもの、つまり加重平均である。この章の終りに列挙されている各種の採水法は、興味深い。3、4 章では、実際仕事をす上で参考になる点が少くない、と思う。4 章で、各種機器分析法に対して、降水研究の立場から著者の意見が述べられているが、これはその一点である。

本書によって、降水化学の研究層が厚くなれば、結構なことだと思う。(気象研 杉浦吉雄)

新 刊 紹 介

日本火山学会「秋田駒ヶ岳 1970—71 年噴火特集号」火山、第 2 集、第 16 巻、第 2—3 号、p. 63—214、1971、(1,200 円)

東北地方において、1801 年鳥海山の活動があつてから、170 年ぶりに溶岩の流出を伴ない噴火が、秋田駒ヶ岳の中央火口丘女岳でおこった。この現象の研究調査に、地質学者、地球物理学者、地球化学者が多数参加

し、多くの成果がえられた。これらの研究結果が、日本火山学会から特集号としてまとめられた。特集号は6つの章からなりたっている。

I. 序論, II. 秋田駒ヶ岳のなりたち, III. 秋田駒ヶ岳の噴火活動史, IV. 秋田駒ヶ岳 1970~71 年の噴火活動の経過, V. 秋田駒ヶ岳 1970~71 年の噴火現象, VI. 秋田駒ヶ岳 1970~71 年噴火の噴出物。

原著論文 18 篇が掲載されており、その内容からも、今回の活動は小規模のものであったものにも拘らず、このような総合的な調査研究が行なわれたのは、おそらく世界でもはじめてであろう。一読に値する秀れた論文集である。(〒113 東京都文京区弥生 1—1—1, 東京大学地震研究所内 日本火山学会, TEL. (03) 813—7421 で入手できる) (倉沢 一)

新 会 員 (1972. 6. 12—8. 31)

正 会 員

(氏名)	(勤務先・在学)	(卒業校・年)
神谷 始	名大理・院・修	愛知教大 1970
中村 誠佑	宮崎大工・工化	宮崎大工 1967
西泉 邦彦	立教大理・化・院・修	立教大理 1971
玉田 攻	京大理・地鉱・院	京大理 1968
若狭 喜作	秋田市聖霊高	秋田大教育 1958
伊藤 妙子	愛知県立春日井高	東教大理 1972
梶谷 敬	名古屋工技試	京大理 1947
池田 隆	京大教養・地学	関西大工 1948
原子 昭	青森県衛生研	秋田鉱専 1948

賛 助 会 員

(社 名)	(所 在 地)
東亜燃料工業 (株)	千代田区一ツ橋 1 丁目 1—1 パレスサイドビル
京都電子工業 (株)	京都市南区吉祥院新田二ノ段 町 68
東海醸造工業 (株)	愛知県西春日井郡勝町大字 鹿田字中海道 3631
(株) 荒川印刷	名古屋市中区千代田 3 丁目 8—16
東燃石油化学 (株)	港区新橋 5 丁目 36 浜ゴムビル
(合) 同仁薬化学研究所	熊本市健甞町村添 2861
丸善石油 (株) 中央研究所	埼玉県北葛飾郡幸手町権現堂 1,134—2

退 会 (1972. 6. 12—8. 31)

正 会 員

(氏名)	(勤務先)	(卒業校・年)
大橋 茂	九大理・化	東大理 1946

賛 助 会 員

(社 名)	(所 在 地)
三興製紙 (株) 祖父江工場	愛知県中島郡祖父江町外平 150

新 会 員 (1972. 9. 1—12. 9)

正 会 員

(氏名)	(勤務先・在学)	(卒業校・年)
大庭 孝夫	東教大理・院・修	東教大 1971
北山 憲三	東工大理・化	九大理・化 1959
米田 義昭	北大水産	北大 1961
平山 宏	近畿大理工	近大・院・化 1965
三井さち子	広島大理・地質在学	
山崎 良雄	東邦大附高 東教大理・院・博	
知名 定則	琉大理工・化・研在学	琉大理工・化 1971
森口 祐三	兵庫県公署研	姫路工大 1968
塩沢 孝之	北大工	北大理・地鉱 1963

賛 助 会 員

(社 名)	(所 在 地)
三井鉱山 (株)	中央区日本橋室町 2 丁目 1—1
(財) 日本分析化学研究所	板橋区舟渡町 1 丁目 7—3 安田工業センター内
(株) 三省堂	千代田区神田神保町 1 丁目 23—3
三菱化成工業 (株)	千代田区丸の内 2 丁目 3—1
多摩化学工業 (株)	中央区日本橋兜町 2 丁目 55

退 会 (1972. 9. 1—12. 9)

正 会 員

(氏名)	(勤務先)	(卒業校・年)
山本 博達	福岡教大・地学	九大理・地質 1950
鈴木 淑夫	無機材研	北大理・地鉱 1951

賛 助 会 員

(社 名)	(所 在 地)
宇部興産 (株)	宇部市西本町 1 丁目 12—32

学会事務所 (166) 東京都杉並区高円寺北 4—35—8
気象研究所 地球化学研究部
電 話 (03) 337—1111 内線 75
振替口座 東京 3 8 6 7 9
日 本 地 球 化 学 会

ニ ュ ー ス (213) 川崎市高津区久本 135
発 行 所 地質調査所 地球化学課
電 話 (044) 8 6 — 3 1 7 1
(編集担当) 倉沢 一・本島 公司
(年 5 回発行予定)

日本地球化学会 ニュース

No. 64

1973. IV. 10

選挙公示

日本地球化学会 1974・1975 年度役員選挙の

立候補者 および 推薦候補者の届出について

1973 年 4 月 2 日

日本地球化学会役員選挙管理委員会

本会会則により 1974・1975 年度役員の選挙を次の日程で行ないます。

立候補者・推薦候補者届出メ切	7 月 30 日 (必着)
選挙公報・投票用紙・会員名簿発送	8 月 20 日
投票メ切	9 月 20 日 (必着)
選挙結果公表 (総会)	10 月 2 日

つきましては、下記により、会長・副会長・評議員に対してそれぞれ立候補者および推薦候補者の届出をしていただくようお願いします。

1. 会長 1 名, 副会長 1 名, 評議員 20 名を選出します。

- 立候補者の届出は、届書を立候補者自身が、i) 本委員会に持参するか、または ii) 本委員会宛に送付してください。
- 推薦候補者の届出は、推薦候補者名と推薦者名を記した届書に、推薦候補者の承諾書をそえて、推薦者またはその代表者が i) 本委員会に持参するか、または ii) 本委員会宛に送付してください。
- 第 2 項と第 3 項に記した以外の方法で届出が行なわれた場合には、届書をうけつけることができません。郵送の場合は、「書留郵便」として下さい。届書の封筒の表に (選挙) と記入して下さい。
- 届出のメ切は、1973 年 7 月 30 日 (必着) です。
- 本委員会の所在地は、東京都杉並区高円寺北 4—35—8 気象研究所地球化学研究部内 (☎166) です。

お知らせ

新名簿発行のため、住所および勤務先変更のかたは、至急、学会事務局へご連絡下さい。6 月 30 日をメ切とします。

お知らせ

1973年地球化学討論会

共催 日本地球化学会・日本化学会

日時 10月1日(月)～3日(水)
会場 秋田大学(秋田市手形学園町)
内容 課題討論および一般討論

課題討論 1. 黒鉱鉱床の地球化学 } 招待講演のみ
2. 有機性鉱床の地球化学 } に限る。
1. プレプリント「黒鉱鉱床の地球化学に関する問題点一付文献集」(渡辺武男編)を準備する。

講演申込締切 7月14日(土)
200字程度の講演内容の概略をつけて、同封の別紙申込用紙(B5)により申し込んで下さい。講演部門はプログラム編成上変更することがあります。講演、討論時間は、一般討論は20分以内です。講演はスライド(35mm)使用に限ります。

講演要旨原稿締切 8月10日(金)
講演要旨原稿は、規定の原稿用紙に黒インクで清書して、下記にてお送り下さい。要旨の字数は、原則として課題討論2600字、一般討論1200字です。

参加登録費・講演要旨集代

	登録費	要旨集代	プレプリント: 渡辺武男編 黒鉱鉱床の地球化学に関する問題点付文献集	計(送料共)
予約(締切日まで)	500円 (学生200円)	1300円	1000円	2,800円
非予約(締切日以後)	500円 (学生200円)	1800円	1000円	3,300円

予約申込締切日 8月10日(金)
講演要旨集は、印刷部数を限定しますので、ご入用の方は、講演希望の有無にかかわらず、別紙申込用紙でお申し込みの上、ご送金下さい。送金ずみの方には要旨集ならびにプレプリントを9月中にお送りする予定です。

総会 10月2日(火)午後
懇親会 10月2日(火)18時から秋田大学構内、生協食堂で行ないます。会費1500円。
エキスカージョン 10月4日(木)～5日(金)
駒ガ岳、八幡平見学の予定。費用2500円(交通費および宿泊費)。先着30名で締切ります。なお参加人員が少ない場合は中止します。申込締切は7月14日(土)です。

申込書・要旨集原稿・予約金送付先
〒010 秋田市手形学園町1-1 秋田大学教育学部
地学教室 椎川 誠(電話 0188-33-5261, 内線 651)

申込書式(B5)

1973年 地球化学討論会講演申込書			
受付番号 *	講演番号 *		
申込者氏名			
連絡先	郵便番号	電話	
演題			
(ふりがな、講演者に○印をつけて下さい)			
発表者氏名および所属			
講演希望部門	決定部門 *		
講演希望時間	決定時間 *		

※ は記入しないで下さい。

1973年 地球化学討論会参加申込書			
受付番号 *			
氏名	所属		
連絡先	郵便番号	電話	
懇親会	出席	欠席	
エキスカージョン	参加	不参加	
送金額	参加登録・要旨集予約 プレプリント「黒鉱鉱床の地球化学に関する問題点」 渡辺武男編一付文献集 懇親会参加費 エキスカージョン参加費	1800円 1000円 1500円 2500円	合計 円 (合計の内訳は左記の該当するところに○印を付して下さい)

※ は記入しないで下さい。

“Journal of Geochemical Exploration”
の発刊について

1970年に発足した“The Association of Exploration Geochemists”が“Journal of Geochemical Exploration”を発刊することになり、そのVol. I, No. 1が1972年6月にでき、1973年からは年4回発行されることになっている。

Vol. I, No. 1の内容は、
J. A. Coope: The history of the Association of Exploration Geochemists
N. H. Brundin & B. Nairis: Alternative sample types in regional geochemical prospecting
R. M. Perhac & C. J. Whelan: A comparison of water, suspended solid and bottom sediment analyses for geochemical prospecting in a northeast Tennessee zinc district
Q. Bristow: An evaluation of the quartz crystal microbalance as a mercury vapour sensor for soil gases
G. J. S. Govett: Interpretation of a rock geochemical exploration survey in Cyprus—statistical and graphical techniques
R. H. Mazzucchelli: Secondary geochemical dispersion patterns associated with the nickel sulphide deposits at Kambalda, Western Australia
D. H. Welte: Petroleum exploration and organic geochemistry

さいごの3ページにわたり、Book Reviewと“The Association of Exploration Geochemists”についての紹介記事がのっている。

[Journal No. 1の価格 一般 12.30 U.S. \$]
Associationの会員 9.00 U.S. \$]

発行所: Elsevier Publishing Company, 335, Jan van Galenstraat Amsterdam, The Netherlands

“The Association of Exploration Geochemists”の入会 御希望の方は“Application Form”をお送りします。
(申込先 〒010 秋田市手形学園町 秋田大学教育学部 椎川 誠 宛)

“Fifth International Geochemical Exploration Symposium”の開催について

上記 Symposium は“The Association of Exploration Geochemists”の主催で1974年4月1日(Mon.)から4日(Thu.)まで Canada, Vancouver の Hyatt Regency Hotel で開催される。

討論課題を下記に掲げる。

- * Factors affecting the selection of sampling patterns, sample materials and sample preparation methods.
- * Advances in analytical techniques.
- * Effective interpretation of geochemical data with or without the use of computers.
- * Case histories of successful geochemical exploration programmes.
- * Exploration in areas of transported overburden in desert and glaciated terrain.
- * Application of vapor phase geochemistry in exploration.
- * The use of geochemistry in exploration for oil and gas.
- * Primary dispersion patterns as guides to ore.
- * Exploration geochemistry in the marine environment.
- * The application of remote sensing techniques in exploration geochemistry.

尚、エキスカージョンは South central British Columbia の鉱山見学が予定されている。

参加及び講演申込先:

Dr. I. L. Elliott, Falconbridge Nickel Mines Limited, 1314 West 71st Avenue, Vancouver 14
British Columbia, Canada
(講演要旨締切は10月末日)

(椎川 誠)

新入会員 (1972.12.11～1973.1.22)

(氏名)	(勤務先)	(卒業校(年))
早田 常盛	長崎県立口加高校	久留米工業専門学校 (1949)
矢島久美子	群馬県衛生研究所	お茶の水女子大・理 (1970)

退会者 手島信義 (72/12/11) 金野陽一 (12/15)

1974—75 年度 イースト・ウエスト センター奨学金募集要項

(アジア・太平洋地域の学生に対するハワイ大学大学院奨学金)

研究分野

奨学金受給者はハワイ大学大学院で各自の専門分野での修士号または博士号の取得につとめる一方、センターにある5つの主題研究所の1つに所属し、研究、セミナーおよびリサーチに参加する。分野は、社会科学および人文科学、応用科学および基礎科学に分けられ、それぞれほとんどの専門が含まれている。

資格

日本国籍を有すること、1939年9月1日以後に生まれた者であること、1973年4月1日以前に大学を卒業していることが条件となっている。博士号所有者と短期大学卒業者は応募資格がない。

選考

1973年4月30日までに登録を完了すること。これからは6月4日に行なわれる TOEFL 試験を受けることができる。1973年8月にセンターの研究所あるいは一般奨学金への受入れ可能性について、書類による予備選考がある。上記の段階を通った者について、選考委員が10月に面接を行ない、候補者をセンターに推薦する。登録票および TOEFL 申込用紙は下記で入手されるか、問合わせのこと。

イースト・ウエスト センター在日事務所
東京都千代田区永田町2-14-2 (画100)
山王グラントビルディング2階
電話 (03) 580-3231~5

日本地球化学会 1972 年度 (1972. 1. 1~12. 31) 会計決算報告

(収 入)	円		円
前年度より繰越	1,972,301	差 引 残 高	2,757,170
正 会 員 費	1,241,374	(内 訳)	円
賛 助 会 員 費	280,000	銀 行 預 金	2,308,377
会 誌 購 読 料	1,374,155	郵 便 振 替	350,710
別 刷 代	960,749	現 金	98,083
広 告 代	45,000		
刊 行 補 助 金	100,000	計	2,757,170
利 息	22,552		
寄 付 金	273,400		
計	6,269,531		
(支 出)	円		
会 誌 印 刷	2,324,871		
ニ ュ ー ス 印 刷	75,000		
郵 送 料	298,945		
人 件 費	351,065		
編 集 費	40,000		
討論会補助金	70,000		
委員会活動費	10,000		
会議・会場費	82,712		
講 師 謝 礼	21,000		
事 務 費	201,193		
銀行等手数料	35,575		
そ の 他	2,000		
(同位元素研究発表会分担金)			
計	3,512,361		

以上、野口喜三雄監事によって事実と相違ないことが承認された。以上、2月評議員会(2/10)において承認された。

学会事務所 (166) 東京都杉並区高円寺北4-35-8
気象研究所 地球化学研究部
電話 (03) 337-1111 内線 75
振替口座 東京 3 8 6 7 9
日本地球化学会

ニ ュ ー ス 発 行 所 (213) 川崎市高津区久本135
地質調査所 地球化学課
電話 (044) 8 6 - 3 1 7 1
(編集担当) 倉沢 一・本島 公司
(年5回発行予定)

日本地球化学会 ニュース

No. 65

1973. VI. 30

[役員選挙]

会長・副会長・評議員の候補者届出について

来る7月30日(月)(必着)は、次期(1974~1975年度)役員選挙のための立候補者・推薦候補者の届出〆切です。届出を期日までにお忘れなくお願いします。なお選挙日程は次のようになっています。

立候補者・推薦候補者届出〆切 7月30日(必着)
選挙公報・投票用紙・会員名簿発送 8月20日
投票〆切 9月20日(必着)
選挙結果公表(総会) 10月2日

公示は地球化学会ニュース No. 64 をご参照下さい。

(現在の学会会員数は721名、賛助会員数は20)

環境問題小委員会について

最近の環境問題の重要性にかんがみ、本学会内にも独自の小委員会を設けることが1972年6月の評議員会において決定され、さしあたり木越邦彦、西条八東、菅原健、杉浦吉雄、西村雅吉、浜口博(小委員長)、半谷高久のメンバーで発足することになった。

第1回の小委員会は1972年10月14日に、ついで第2回を11月24日に開催した。第1回の会合では、主として菅原委員から内外の動きとして、日本学術会議が第9期中に国際環境保全会議を計画していること、国際海洋汚染モニタリング計画、日本学術会議環境特別委員会の国内向け活動、1975年夏に IAGC が環境を目標にした水の化学的研究に対する方法のシンポジウムを、カナダのトロントで計画していること等の紹介があり、情報交換程度に止まった。第2回の委員会において、日本地球化学会として環境問題に関し、1) どういう方針で臨むのか、2) 何をすべきか、3) 何ができるか、について検討した。方針としては、学会として取り組む範囲を明確にすべきであるとの話合いがあり、background や migration の問題などに限り、特定の問題(水俣病やイタイタイ病など)はとりあげないのがよからう。学会としてできることとしては、プロジェクトの提起、討論会・シンポジウム・講座などの主催、出版、公的機関との連絡などがあろう。緊急に重要な研究問題として baseline studies, 分析値の信頼性, standard sample の作成ならびに配布などについて話合いが行われた。(浜口 博)

学会事務所 (166) 東京都杉並区高円寺北4-35-8
気象研究所 地球化学研究部
電話 (03) 337-1111 内線 75
振替口座 東京 3 8 6 7 9
日本地球化学会

ニ ュ ー ス 発 行 所 (213) 川崎市高津区久本135
地質調査所 地球化学課
電話 (044) 8 6 - 3 1 7 1
(編集担当) 倉沢 一・本島 公司
(年5回発行予定)

IAGC Working Group on Isotope Geochemistry について

昨夏、カナダのモントリオールにおける第24回万国地質学会(IGC)の折、標記についての会合が持たれて招集され、出席しました。これは1970年9月東京でのIAGCの折に芽を出していたもので、今回が2度目の集り。座長 M. FORNASERI (イタリー)、書記 U. ASWATHANARAYANA (インド) で E. INGERSON はじめ9カ国から17人が集まり free talking を行なった結果、Working Group の発足については全員異議なく、当面次のようなプログラムで活動を進めてはということでした。i) 世界の同位体地球化学者の directory の作成, ii) 同位体比測定用各種標準物質に関する諸問題の検討, iii) 関連諸国際グループとの inter disciplinary symposia 開催の検討, iv) IAGC メンバーへの Working Group の活動報告。

その後今年3月29日付で Secretary の ASWATHANARAYANA から上記諸件を再確認する通知があり、同時に i) の件でさっそく作業に入りたいので、日本の窓口を引受けるよう依頼がありました。モントリオールでの集りにたまたま出席したという事情から佐々木に連絡があったものと思われますが、将来 Working Group の

活動が本格化する場合には、わが国としてより適当な人選でのぞむべきかと考えます。3月29日付で通知のあった各国の委員予定者は次の顔触れです。M. FORNASERI (Chairman), U. ASWATHANARAYANA (Secretary), S. EPSTEIN (米), J. WEBER (米), P. FRITZ (カナダ), E. I. DONTSOVA (ソ連), J. Y. KANTOR (チェコ), V. MERCEA (ルーマニア), J. GEISS (スイス), H. PUCHELT (西独), J. C. FONTES (フランス), S. MOORBATH (英), W. COMPSTON (豪), D. LAL (インド), A. SASAKI (日)

なお上記 i) については既に記入用紙が佐々木の手許にとどいていますので6月中には関係の方々に発送の予定です。ご協力をお願い致します。発送もれがあるといけませんので、ご希望の方は直接佐々木宛ご連絡いただけると幸いです。

〒162 東京都新宿区河田町8

地質調査所鉱床部 佐々木 昭

Tel. (03) 341-7131

特別講演のお知らせ

演題

1. New Observational Evidence on the Early Evolutions of Stars and Solar System
2. Effects of Cosmic Ray Bombardments on the Lunar Surface (未定)

講演者

J. R. Arnold 教授 (カリフォルニア大学)

時・場所

昭和48年7月21日(土) 午後2時~4時

東京・本郷東大赤門横 学士会館別館

Hydrogeochemistry シンポジウム

論文集

1970年9月、東京で開催された国際会議の論文集 Hydrogeochemistry, Volume I が発行されております。IAGC の会員あるいはシンポジウム参加者であれば1冊 US\$ 10.00 で入手できます。総ページ数662で、重量が1,265 g あるので、送料も加算されます。入手方法等については、学会事務局にお問い合わせ下さい。

なお、発行所は下記の通りです。(菅原 健)

The Clarke Company, Canal Square
1054 31st Street, N. W. Washington D. C.
20007 U. S. A.

学術賞「地球化学研究協会三宅賞」の受賞候補者推薦依頼について

三宅泰雄教授退官記念事業として昨年創立されました地球化学研究協会では、地球化学の研究に著しい業績をおさめた科学者に「地球化学研究協会三宅賞」を贈呈いたすことになりました。つきましては、なにとぞ、下記の要領により受賞候補者のご推薦をお願いいたします。

1. 本賞は地球化学の研究に顕著な業績をおさめた科学者に贈呈します。
2. 本賞は賞状とし、副賞として賞牌および賞金(30万円)をそえます。

3. 本賞の贈呈は原則とし、1年1件(1名)とします。
4. 本年の贈呈式は、1973年12月5日(水)東京において、おこなう予定です。
5. 用紙(形式あり)に受賞候補者の略歴、推薦理由、主な業績文献リスト等を記入して、1973年10月15日(月)〔到着〕までに下記にお送りください。

連絡先 〒166 東京都杉並区高円寺北4-29-2-217

地球化学研究協会 電話 (03) 330-2455

中国から地球化学(季刊)の発刊

1966年の中国の文化大革命以来、同国からは地球科学関係の出版物が我が国へ入っていなかった。今回“地球化学”が地質調査所の図書室に入ったので、簡単に紹介する。

誌名 “地球化学”, 1973年第1号, 約60頁, 1973年3月出版

編集 中国科学院貴陽地球化学研究所 <地球化学>
編輯組 貴陽市觀水路50

出版 科学出版社, 北京朝陽門内大街137号

発行 全国各地郵便局

部数 3,000

定価 0.90元(1元=133円)

編集案内によると、この雑誌は学術的な季刊誌で、取扱う内容は、主に鉱物学、地球化学、岩石学、堆積学、同位体地質学、鉱床学、環境地質、実験地質、物の成分などである。論文は長さが1万字以内、概報は3,000字以内とされている。中国語で書かれていて、論文標題も英語やロシア語がついていない。文字は香港や台湾で使われている繁体字ではなく、もち論、簡体字によっているので、日本人には馴れるまで読みにくいと思われる。

1973年第1号の内容は以下の通り。

- ・環境汚染の問題と地学従事者の任務
- ・堆積変質—熱液交代型の稀土、鉄鉱床の成因特性
- ・中国某地の先カンブリア紀ほう酸塩鉱床の特性
- ・江西省九江地区の岩石の同位体年令
- ・アルゴンの中性子放射化分析を用いた岩石の K-Ar 年令
- ・新鉱物、変種鉱物(3件)
- ・図書紹介、科学技術消息、学術動向など

(本島公司)

論文集「自然界における

微量元素の存在量について」

上記題目についての講演会が、1972年11月2日、静岡県富士宮市の資源大学校で、日本鉱山地質学会の主催で行なわれ、その論文集が発行されました。その内容と入手方法は下記の通りです。

鉱山地質 特別号 第5号(1973年5月31日) 56頁

- ・序にかえて
- ・地殻における微量元素の分布について
- ・地表付近の微量成分について
- ・鉱床地域の地表あるいは地表近くにおける微量元素の濃集について
- ・鉱床地域における土壌中の微量元素の存在量について——とくに亜鉛、銅、鉛、ニッケル、コバルト、クロムおよび銀
- ・岩石・土壌・河川堆積物中のひ素の存在量について
- ・諸岩石中のウランおよびトリウム量について
- ・自然水中のウラン含有量について
- ・神通川流域の岩石・土壌中の重金属について
- ・ニュージーランド、コロマンデル地域の花崗閃緑岩中の Cu の含有について
- ・ザイール共和国シャバ州南東部の土壌中に含まれる銅について
- ・総括討論および講演会記事

発行所 〒104 東京都中央区銀座8-5-4

日本鉱業会館5階

日本鉱山地質学会

(電話 573-3997) 振替口座 東京 66834

学会会員は500円、その他の方は600円。送料75円。
(倉沢 一)

評議員会報告

- 1972年12月9日, 京都楽友会館 (出席13名)
第9期学術会議第4部付置地球化学宇宙化学連合小委員会が開かれ, 菅原健氏が小委員長に選ばれた。本会会員では, 三宅, 菅原, 本田, 北野, 桂の5氏が委員。
1972年度討論会 (仙台) の会計報告。
環境問題小委員会が本号第1頁にあるように開かれた。
1973年度討論会 (年会) はニュース No. 64 のような内容で行なわれることが了承された。
1974~1975年度役員選挙のための選挙管理委員として松尾, 倉沢, 増田, 馬淵および事務局より1名の5氏に依頼された。(委員長は2月10日の評議員会で杉浦氏に決定)
上記学術会議への委員として浜口, 松尾, 小穴の3氏が決定した。
●1973年2月10日, 学士会館本郷分館 (20名)
GDP 48年度予算が認められ, 西太平洋, 島弧, マントル対流の3小委員会が発足したとの報告があった。
国立極地研究センターが研究所 (共同利用) として新設, および東大海洋研究所臨海施設の予算がみとめられた。
Geochemical Journal の発行の定期化がいそがれた。
ニュース No. 64 第4頁のように, 会計監事から報告があった。
地球化学将来計画委員会の新聞が引続き発行されている。地球化学の大学での講座設置を文部省に働きかけたいむね, 協力依頼があった。
1973年度地球化学討論会の具体案が示され了承された。討論会を年会とする提案が出されたが, 見送りとなった。
1974~1975年度役員選出のスケジュールが認められた。
南極 DVDP (Dry Valley Drilling Project) が, 日本, アメリカ, ニューゼーランドの共同で行なわれ, 48年度予算が認められ, また本会に極地問題小委員会をおくことになった。
●1973年4月14日, 学士会館本郷分館 (14名)
IAGC への加盟が本決りになった。1970年国際シンポジウムの論文集が発行された。(本号のニュース参照)
選挙要領の具体案が承認された。(ニュース No. 64)
地質年代学国際小委員会委員として, 地調柴田賢氏からの依頼があり, 木越氏が推せんされた。
学術会議に地球化学・宇宙化学研究連絡委員会の設置

要望書を提出することとした。

特別講演会開催について申し出があった。本号ニュースにその内容が示されている。
DVDP 関係として, 極地問題小委員会を中井 (名大), 倉沢 (地質調), 室住 (室蘭工大), 吉田 (広大), 綿抜 (東大), 木下肇 (気象大), 鳥居 (極地研振) の7氏で発足することになった。
1973年度三宅賞候補者の推せん依頼があった。(本号ニュース参照)

●1973年6月9日, 東大海洋研究所

評議員会の議事録が承認されてからお知らせします。
なお, 1974年度討論会は東京の予定。1973年度討論会のプログラム編集会議は7月20日気象研で開かれ, 直ちにニュースに印刷。

シベリヤー日本一太平洋地域の地殻・マントル構造に関する第2回日ソシンポジウムについて

日ソシンポジウム実行委員会から, 標記のシンポジウムのお知らせがまいりました。なお, 申込期日にゆとりがなく (5月28日), お知らせがおくれましたが, 下記の要領で行なわれますのでご報告いたします。

- 時期 1973年10月29日~11月6日
日程 10月29日~11月2日, 東京 (講演会と分科会)
11月3日~6日, 北海道 (分科会とエキスカ-ション)
テーマ 地球物理学よりえられたシベリヤー日本一太平洋地域の構造
1) 人工および自然地震による地殻・上部マントル構造
2) 構造と地震活動, テクトニクスとの関係
3) 重力, 地磁気, 地殻熱流量と構造, テクトニクス
4) 年代決定とテクトニクス, 火山活動, 地質
参加費 3,000円 (学生1,500円)
使用語 英語
連絡先 〒113 東京都文京区弥生1-1-1
東京大学地震研究所 浅野周三
Tel. (03) 812-2111 (内線 6505)
ソ連からの出席者には, 火山化学関係の研究者が多数あるものと思われます。

日本地球化学会ニュース

No. 66

1973. VIII. 20

— 学会プログラム特集号 —

1973年度 地球化学討論会

主 催 日本地球化学会・日本化学会
会 期 1973年10月1日 (月)~10月3日 (水)
会 場 秋田大学教育学部 (〒010) 秋田市手形学園町

日 程 表

時	9:00	9:30	12:30	13:30	16:30	17:30	18:00	20:00
日								
1日 (月)		受	一般討論 A B C	休	課題討論 II A 一般討論 B 一般討論 C			評議員会 (本部会議室) 有機地化談話会 (2号館, 213)
2日 (火)			一般討論 A B C		一般討論 A B C	総会 A		懇親会 (学生食堂)
3日 (水)		付	一般討論 A B C	憩	課題討論 I A			
4日 (木) ~ 5日 (金)	エキスカ-ション (秋田駒ヶ岳, 八幡平) 1泊2日							

- 第1日 10月1日 (月)
A 会場
— (9:30~12:30) —
座長 藤 貫 正
1 A01 Calcite-Aragonite 晶出に与える Mg^{2+} イオンの効果 (I)
(琉球大理工) °大森 保, 渡久山章
1 A02 Calcite-Aragonite 晶出に与える Mg^{2+} イオンの効果 (II)
—核形成への寄与および速度からの考察—
(琉球大理工) °大森 保, 渡久山章
1 A03 ストロンチウムを含むアラゴナイトのカルサイトへの転移
(九大理) °樽谷俊和, 吉永康則
座長 兼 島 清
1 A04 炭酸カルシウム沈殿と水溶液との間のマグネシウムの分配定数について
(名大理, 愛知教大*) °北野 康, 金森暢子, 吉岡小夜子*
1 A05 Magnesium Calcite 中の Sr 含量
(琉球大理工) °渡久山章, 親川正堅

- 1 A 06 南西諸島における炭酸塩堆積物の研究(第1報)
与論島および沖永良部島産石灰岩の結晶構造
(都立大理) °寺井 稔, 望月葉子,
太田直一

座長 樽 谷 俊 和

- 1 A 07 ピーチロックの生成機構
(都立大理) °荒木 匡, 堀 信行,
寺井 稔, 堀内公子

- 1 A 08 佐渡島の“小木炭酸塩岩”に関する岩石学的並びに地球化学的問題
(早大理工) °今井直哉

- 1 A 09 石灰岩の風化過程におけるウランの挙動について
(琉球大理工) 兼島 清, °平良初男, 渡久山章
(金沢大理) 中西 孝

—(13:30 ~ 17:30)—

課題討論 II「有機性鉱床の地球化学」

コンビナー 小山忠四郎, 本島公司, 中井信之
座 長 半谷高久, 安藤直行, 工藤修治

- 1 A 10 ①最近における炭化水素鉱床の地球化学的研究について (35分+5分)
(地質調) °本島公司
(石油開発技術センター) 工藤修治
(帝国石油技研) 藤田嘉彦
(石油資源技研) 浅川 忠

- 1 A 11 ②堆積物形成過程における有機化合物の変化 (35分+5分)
(名大理) °小山忠四郎
(名大理) °半田暢彦

休み <20分>

- 1 A 12 ③有機地球化学的立場からみた油田成立の条件—裏日本新第三紀油田を例として—
(35分+5分)
(東北大理) °田口一雄, 佐々木清隆,
佐藤俊二, 林田進男

- 1 A 13 ④石油・天然ガス鉱床の同位体地球化学の諸問題 (35分+5分)
(名大理) °中井信之
(地質調) 安藤直行
(名大理) 吉田 裕

総合討論 (60分)

B 会 場

—(9:30 ~ 12:30)—

座長 小 沢 竹二郎

- 1 B 01 宮城県鳴子町川渡温泉について
(東北学院大工) °鈴木幸喜, 渡辺淳夫
- 1 B 02 新潟県瀬波温泉の地質学ならびに地球化学的研究
(農工大工, 信州大教育*) °阿部修治,
飯島南海夫*

- 1 B 03 草津温泉における温泉相互の関係の解析
(東大教養) °綿抜邦彦, 高野穆一郎

座長 綿 抜 邦 彦

- 1 B 04 広島県内温泉水の地球化学的特質
(広島県衛研) 調枝勝幸

- 1 B 05 イェローストン国立公園の温泉の化学成分とその地球化学的意義 (3)
(東邦大教養, 岩大教育*) °野口喜三雄,
後藤達夫*, 相川嘉正

座長 松 尾 禎 士

- 1 B 06 登別温泉の酸素同位体組成
(室蘭工大) 安孫子勤

- 1 B 07 鳴子地域の温泉水の同位体組成よりみた経年変化
(名大理) °滝本幹夫, 中井信之

- 1 B 08 伊豆半島東南部の温泉水の同位体および化学組成について
(名大理) 水谷義彦

- 1 B 09 有馬温泉の水の δD , $\delta^{18}O$ と炭酸の $\delta^{13}C$ について
(岡大温研, 大阪市大理*) °松葉谷治,
鶴巻道二*, 酒井 均

—(13:30 ~ 17:30)—

座長 小 坂 丈 予

- 1 B 10 玉川における酸流出量の減少について
(鹿島建設技研, 大成道路技研*) °有泉 晶,
牧 隆正*

- 1 B 11 山口県下の温・鉱泉中のウラン分布
(地質調) °望月常一, 小尾五明,
黒田和男, 坂巻幸雄

- 1 B 12 玉川温泉(大ブキ)による岩石の溶出
(東邦大理, 東工大理工*) °吉地雄蔵,
岩崎岩次, 吉田征子, 小沢竹二郎

- 1 B 13 鉄質沈殿物の熱的性質
(東北大教養) 鈴木励子

座長 一 国 雅 巳

- 1 B 14 温泉沈殿物中の水銀の分析法およびその含量
(千葉大理) °中川良三, 大八木義彦

- 1 B 15 Ra-228の地球化学—陸水・温泉沈殿物の測定
(金沢大理) °大久保隆, 阪上正信

座長 水 谷 義 彦

- 1 B 16 白根沢の硫化水素
(高崎女子高) 関口敬介

- 1 B 17 別府地熱地帯の噴気ガス成分
(九大温研) °古賀昭人, 野田徹郎

- 1 B 18 地熱地帯の探査における蒸気系の化学的インデ
ィケーター
(九大温研) °古賀昭人, 野田徹郎

座長 古 賀 昭 人

- 1 B 19 草津白根火山周辺の火山周辺の火山ガスの分布
とその特性について
(東工大工, 上智大理工*) °小坂丈予,
野村昭之助*, 高江洲壁*, 小坂知子*

- 1 B 20 秋田駒ヶ岳1970年噴火の経過と地球化学的研究
(東工大工) 小坂丈予

C 会 場

—(9:30 ~ 12:30)—

座長 角 皆 静 男

- 1 C 01 秋田における降水中の化学成分と気象との関係
(成蹊小, 気象研*) °竹内丑雄,
葛城幸雄*

- 1 C 02 降水中の $^{34}S/^{32}S$ について
(名大理, 成蹊小*) 中井信之, °竹内丑雄*

- 1 C 03 秋田における冬の Sr-90 降下量の増加と気象
との関係
(地化協, 気象研*) 三宅泰雄,
猿橋勝子*, 葛城幸雄*, °金沢照子*

- 1 C 04 南極氷床みずほ高原からえたボーリング・コア
の酸素同位体組成について
(名大理) °加藤喜久雄, 渡辺興亜

座長 猿 橋 勝 子

- 1 C 05 海塩粒子の陸上への輸送量
(北大水産) °角皆静男

- 1 C 06 ベーリング海における二酸化炭素平衡分圧の分布
(名大理, アラスカ大海洋*) °金森 悟,
J. J. Kelley*, D. W. Hood*

座長 金 森 悟

- 1 C 07 東京湾の混合水系
(気象研, 気象協会*, 東海大**)
°杉浦吉雄, 鈴木正基*, 久保田修**

- 1 C 08 海洋中の硝酸イオンの窒素同位体比
(東大海洋研) °和田英太郎, 服部明彦

—(13:30 ~ 17:30)—

座長 岡 部 史 郎

- 1 C 09 海水中のクロムについて
(近畿大理工, 京大化研*) °合田四郎,
中川和実, 玉暉宗夫, 重松恒信*

- 1 C 10 南太平洋東部海域海水のトリウム同位体含量
(地化協, 気象研*) 三宅泰雄, °杉村行勇

- 1 C 11 海水成分の存在状態と新しい平均滞留時間の見
積り
(北大水産) °角皆静男, 日下部正志

座長 杉 村 行 勇

- 1 C 12 海水中の非生物起源粒子について
(北大水産) 角皆静男, 城戸勝利,
°南川雅男, 山田耕一郎

- 1 C 13 海水懸濁物の除去機構について
(北大水産) 角皆静男, °南川雅男

座長 重 松 恒 信

- 1 C 14 海水での鉄とマンガンの共沈 (第3報)
(東海大海洋) °菊地 潔, 岡部史郎

- 1 C 15 鉄, マンガン共沈でのニッケルの動行について
(東海大海洋) °菊地 潔, 岡部史郎

- 1 C 16 海水の粒状ケイ酸の溶出速度について
(地質調) °松本英二

座長 中 西 孝

- 1 C 17 海底土, 堆積物中のセレン含量
(清風南海高, 近大理工*, 京大化研**)
°由井 収, 平木敬三*, 西川泰治*,
重松恒信**

- 1 C 18 日本海10mコアの化学組成
(名大理, 東大海洋研*) °増沢敏行,
北野 康, 小林和男*

- 1 C 19 日本海海底土柱状試料におけるウランの分布と
氷期との関係
(地化協, 気象研*) 三宅泰雄, °杉村行勇*

第2日 10月2日(火)

A 会場

—(9:30~12:00)—

座長 工 藤 修 治

- 2 A 01 海水中の炭水化物の定量
(近畿大理工) °平山 宏, 平木敬三,
西川泰治, 畑山 隆
- 2 A 02 限外濾過法による海水中の溶存有機物の分子量
分画
(都立大理) °小倉紀雄
- 2 A 03 GC-MS による水中有機物の検索
—主として有機酸類について
(都立大理) °松本源喜, 石渡良志,
半谷高久
- 2 A 04 湖底堆積物の揮発生脂肪酸について
(名大理) °松田ひろみ, 小山忠四郎
- 2 A 05 有機物からみた標名湖古環境 (1)
脂肪酸組成からの知見
(都立大理) °石渡良志, 小椋和子

- 2 A 06 有機物からみた標名湖古環境 (2)
(都立大理) °小椋和子
- 座長 小 椋 和 子
- 2 A 07 湖底堆積物における高級アルコールの存在につ
いて
(名大理) °西村弥亜, 小山忠四郎
- 2 A 08 プラクトンにおけるスタノールの存在につ
いて
(名大理) °西村弥亜, 小山忠四郎
- 2 A 09 湖底堆積物中のステロイド化合物に関する研究
(名大理) °西村弥亜, 小山忠四郎

—(13:30~16:30)—

座長 半 田 暢 彦

- 2 A 10 日光湯湖における有機炭素の循環と収支
(都立大理) °水谷達夫, 半谷高久
- 2 A 11 水中の尿素の分解実験について
(都立大理) °佐藤泰哲, 半谷高久
- 2 A 12 児島湖の湖底堆積物における有機性 C:N 比に
ついて
(愛媛大) °二階堂要
- 2 A 13 東支那海東部海域の海底堆積物中のアミノ酸に
ついて
(地質調, 東海大理*) °寺島美南子,
水野篤行, 田中峰雄*

座長 二階堂 要

- 2 A 14 環境中の多環芳香族炭化水素に関する研究 (第
3報)
ガスクロマトグラフィー及びマスフラグメント
グラフィーによる平潟湾内堆積物, マハゼ中の
多環芳香族炭化水素の定量
(都立大理) °松島 肇, 半谷高久
- 2 A 15 日南層と四万十累層の堆積岩の可溶性および不
溶性有機物について
(地質調) °牧 真一, 永田松三
- 2 A 16 堆積岩中の有機物の熱的変質—炭化水素生成に
関する室内実験の結果について
(地質調) °米谷 宏, 大場信雄
- 2 A 17 水溶性天然ガス鉱床の炭素, 水素, 酸素の同位
体組成について
(名大理) °吉田 裕, 中井信之
- 2 A 18 紙の生産, 使用, 廃棄にともなう物質の循環,
変化の概要
(都立大理) 天谷清久, °半谷高久

B 会場

—(9:30~12:30)—

座長 北 野 康

- 2 B 01 貝殻中の微量元素含量
(都立大理, 立教大原研*, 東教大理**)
°太田直一, 戸村健児*, 太森昌衛**
- 2 B 02 環境水, 外套液および貝殻内微量成分の関係
(地質調, 真珠研*) °藤貫 正, 和田浩爾*
- 2 B 03 骨のマンガン含量およびフッ素含量と年代との
関係
(日本医大) °下田信男, 北村泰子
- 2 B 04 化石サンゴの I₀ 年代と ¹⁴C 年代
(学習院大理) °手塚 瞳, 木越邦彦
- 座長 梅 本 春 次
- 2 B 05 ²³⁴U/²³⁸U による地下水年代測定
(学習院大理) 木越邦彦
- 2 B 06 地下水の ¹⁴C 年代決定に関する一考察
(理研) °浜田達二, 浜田知子
- 2 B 07 南極昭和基地付近の露岩地帯の陸水について
(横国大教育) 村山治太
- 2 B 08 南極の塩湖の化学成分—栄養塩を中心として
(千葉工大, 広大文*, 北大水産**,
日本分析研***) 鳥居鉄也, 吉田栄夫*,
°中谷 周**, 橋本文夫***, 西村雅吉**

—(13:30~16:30)—

座長 松葉谷 治

- 2 B 09 海水浸入型地層水の SO₄²⁻ 濃度と与えるアル
カリ錯体の影響
(函館工専) 水上正勝
- 2 B 10 地下水塩水化に伴う水の酸素, 水素同位体組成
の変化, その1—静岡県浜松, 磐田両地域の例
(地質調) °池田喜代治, 安藤直行
- 2 B 11 地下水塩水化に伴う水の酸素, 水素同位体組成
の変化, その2—富士市の例
(地質調) °安藤直行, 池田喜代治
- 座長 阿 部 修 治
- 2 B 12 宮崎ガス田北部地域の地下水および天然ガス
(地質調) °比留川貴, 大場信雄
- 2 B 13 岐阜県土岐構造盆地の地下水の水質
—特に含フッ素水の分布について—
(地質調, 動燃*) °坂巻幸雄, 望月常一,
小尾五明, 黒田和男, 目黒 昇*,
広瀬恒雄*
- 2 B 14 東六甲山系河川水の水質
—特にフッ素イオンについて—
(甲南大) 日下 譲, °佐川直史

- 座長 加 藤 喜久雄
- 2 B 15 第三紀層地すべり地と破砕帯地すべり地の水質
(京大防災研) °吉岡龍馬, 奥田節夫
- 2 B 16 循環水中の多元素分析
(都立アイソトープ研) °谷崎良之, 永塚澄子

C 会場

—(9:30~12:30)—

座長 田 口 一 雄

- 2 C 01 泥質岩の粒度と化学組成—別府湾
(地質調) 狛 武
- 2 C 02 堆積岩の堆積環境と指示元素 (V)
—北海道夕張地区堆積岩のホウ素含量
(群大工) 赤岩英夫, 相沢省一, °橋爪 明
- 2 C 03 堆積岩のホウ素含量と含水率について
(東大海洋研, 名大理*) °石塚明男,
中井信之*
- 座長 倉 沢 一
- 2 C 04 浅間山 1973 年活動における降灰の分布と成分
のかたより
(東工大) °小坂文予, 小沢竹二郎,
大平洋子, 富田毅, 港 一郎, 小椋英明

- 2 C 05 東北, 北海道の第四紀火山岩中の微量元素
(1) ウラン, トリウム の分布
(京大教養, 大阪府大教養*, 北大理**)
°西村 進, 池田 隆, 増田康之*, 勝井義雄**
- 2 C 06 東北, 北海道の第四紀火山岩中の微量元素
(2) 希土類元素
(大阪府大教養, 京大教養*, 北大理**)
°増田康之, 西村 進*, 池田 隆,
勝井義雄**
- 座長 西 村 進
- 2 C 07 浅間山安山岩の石基一斑晶間の元素の分配
(立教大原研, 東学大*, 東大理**)
樋口英雄, 小沼直樹*, 木本 統**,
浜口 博
- 2 C 08 希土類元素の分配に関する常圧での室内実験
(東理大理) 増田彰正, °稲永直志,
地引久和
- 2 C 09 Deep Sea Drilling Project (Leg 6, Leg 7)
によりえられた岩石中の希土類元素の存在度
(都立アイソトープ研, 東理大理*)
°下川利成, 名川忠志*, 増田彰正*

—(13:30~16:30)—

座長 酒 井 均

- 2 C 10 茨木花崗岩体の形成過程にみられる酸素同位体
分別
(地質調, 神戸大*, 岡大温研**)
°松久幸敬, 田結庄良昭, 松葉谷治**
- 2 C 11 変成作用による, 石墨—炭酸塩間の炭素同位体
交換反応について
(名大理) °和田秀樹, 中井信之,
小穴進也
- 2 C 12 揮発性微量元素の地球化学 (1)
段階的加熱法による岩石中の水銀の挙動
(東大理) °脇田 宏, 浜口 博
- 座長 長 沢 宏
- 2 C 13 EuAl₃Si₂O₈ の合成と, その生成の酸素分圧
(秋田大鉦) 岩崎文嗣
- 2 C 14 スピネル固溶体 (Fe₂TiO₄-FeCr₂O₄) の磁気
的性質
(東工大理) °北山憲三, 桂 敬
- 2 C 15 リン灰石中の核分裂片飛跡
(九大理) °森 誠治, 大崎 進, 梅本春次

- 座長 佐藤和郎
- 2 C16 第2次 インド・デカン高原調査報告
(地質調) °倉沢 一, (東大震研) 荒牧重雄,
(山形大理) 今田 正, (東北大理) 青木謙一郎
(東大教養) 木島 治, (気象大) 木下 肇,
(東大理) 石橋克彦
- 2 C17 海洋地域玄武岩の ($^{87}\text{Sr}/^{86}\text{Sr}$) とその地球物理
学的意味
(東大理) °座主繁男, 松田准一,
小嶋 稔

第3日 10月3日(水)

A会場

- (9:30~12:30)—
- 座長 脇田 宏
- 3 A01 複雑な星間分子の生成機構(II)
Dust 表面への星間分子の吸着
(東大理, 電通大*) 井口哲夫, 中川直哉*,
°坂田 朗*, 村上 仁*
- 3 A02 Allende 隕石中のオリビンコンドルールの化
学組成
—特に巨大コンドルールについて
(東学大, 地質調*, 東理大理**) 小沼直樹,
°田中 剛*, 中村 昇**, 増田彰正**
- 3 A03 エンスタタイトコンドライト中の希土類元素
(東理大理) 増田彰正, °長沢 繁, 中村 昇
座長 松本 隆
- 3 A04 隕石構成成分間におけるモリブデンおよびタン
グステンの分布
(東大物性研) °佐藤恵子, 本田雅健
- 3 A05 Apollo 16 および 17 号月物質の化学組成
(東理大理, 地質調*) 増田彰正,
°中村 昇, 田中 剛*, 倉沢 一*
- 3 A06 イン石鉱物の凝集環境の推定と結晶構造
(学習院大理, 東学大*) °長沢 宏,
小沼直樹*
- 座長 増田 彰正
- 3 A07 原始大気—海洋系の成立
(東工大理, 名大理*) °松尾禎士, 北野 康*
- 3 A08 地球化学的に定められた楯状地における地球内
部の温度分布
(岡大温研, 北大理*) °松本 隆, 岡康 民*

- (13:30~18:00)—
- 課題討論 I 「黒鉱鉱床の地球化学」
コンビナー 渡辺武男, 一国雅己, 佐藤壮郎,
酒井 均
- 座長 松隈寿紀, 松尾禎士, 立見辰雄
- 3 A09 ①黒鉱鉱床の地球化学に関する2, 3の問題点
(30分)
(秋田大) °渡辺武男
- 3 A10 ②黒鉱鉱床の生成環境と鉱石構成元素の起源
(45分+20分)
(地質調) °佐藤壮郎
- 3 A11 ③温泉水から推定した黒鉱鉱液の化学
(45分+20分)
(東北大教養) °一国雅己
- 3 A12 ④温泉水からみた黒鉱鉱液の同位体化学
(45分+10分)
(岡大温研) 酒井 均
- 総合討論 (45分)

B会場

- (9:30~12:00)—
- 座長 今井直哉
- 3 B01 祖母・大崩山群に伴う金属鉱床の微量成分
—豊栄鉱山—
(地質調) 安藤 厚, 大町北一郎
- 3 B02 茨城県日立鉱山産硫化鉱物のイオウ同位体比
(岡大理) °山本雅弘, 加瀬克雄
- 3 B03 黒鉱鉱床中金属量と基盤岩石中 Cu, Pb, Zn 量
との対応性
(地質調) °石原舜三, 寺島 滋
座長 安藤 厚
- 3 B04 秋田県深沢鉱床における母岩中の微量成分と鉱
床との関係について
(地質調) 東野徳夫
- 3 B05 金属鉱床地区の地表における元素の濃集につい
て
(秋田大教育, 地質調*, 秋田聖霊高**) °椎川 誠, 東野徳夫*, 若狭喜作**

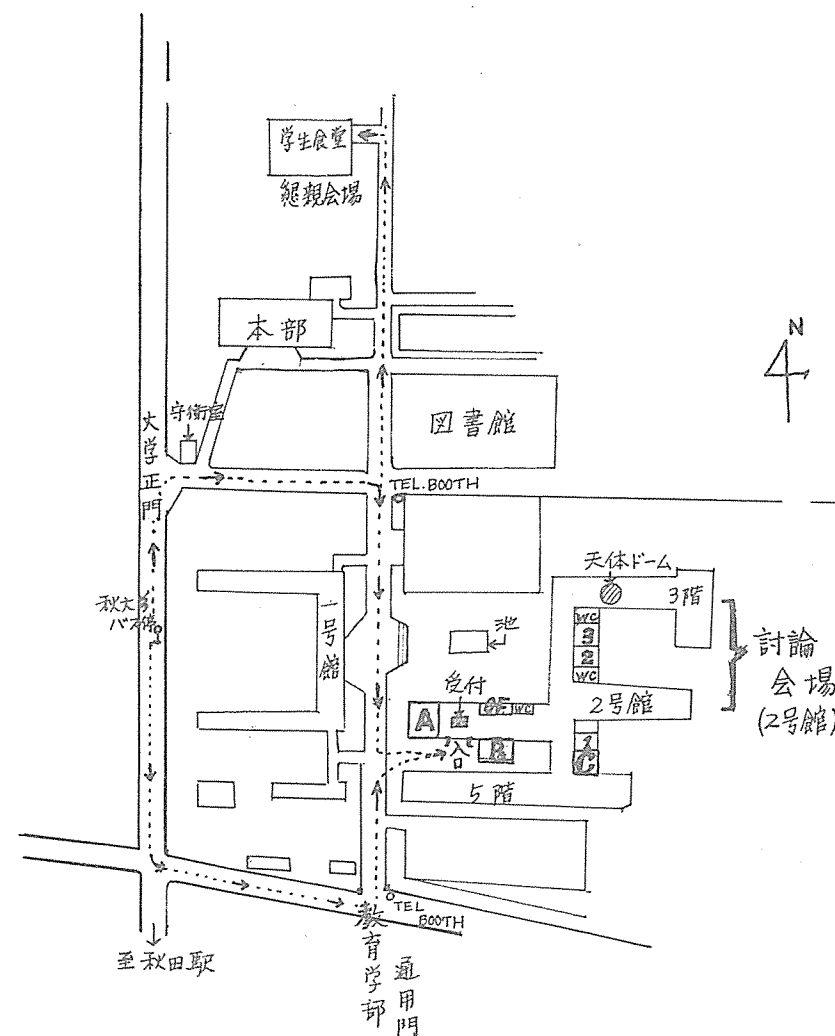
- 座長 佐原良太郎
- 3 B06 ケイ酸の溶解速度に対する塩の効果(続報)
(名工大, 東邦大*) 神谷 宏,
尾崎敦子, °今橋正征*
- 3 B07 ミョウバンの結晶析出過程における微量元素の
分配
(東大理) °菅野 等, 脇田 宏, 浜口 博
- 3 B08 休廃鉱山坑内水の水質変化
(福教大) °細川 巖, 大島文男

C会場

- (9:30~12:30)—
- 座長 桑本 融
- 3 C01 湖面と大気間の二酸化炭素の交換速度
(名大理) °小山忠四郎, 西村弥亜,
松田ひろみ
- 3 C02 神流湖における淡水の赤潮発生について
(群馬県衛生研) 矢島久美子
- 3 C03 空知川水系の水質, 水文学的研究(その3)
融雪期の水質変動について
(北大工) °那須義和, 東郷昭彦
座長 入江 敏勝
- 3 C04 河口域における溶存化学種の挙動について
(京大理) °桑本 融, 中山英一郎,
興津 博, 畠山祐二, 国司秀明,
藤永太郎
- 3 C05 水質汚染と河川水の界面化学的特性の変化
(都立大理) 安部喜也
- 3 C06 白岩川の水質汚濁について
(富山工専) °布村啓一, 寺田龍郎
座長 那須 義和
- 3 C07 蔵王川水系の水質変化
(山形大理) °入江敏勝, 小野美知子
- 3 C08 草津湯川水系の人工中和(第2報)
(東工大工, 上智大理*) 小坂文予,
°野村昭之助*, 小坂知子*, 与芝憲一
- 3 C09 大阪市内河川水中の重金属の溶存状態について
(大阪市衛研) °土永恒弥, 小田国雄,
宇野源太

- 総会 10月2日(火)
一般講演終了後, 引き続きA会場にて開催しま
す。
- 懇親会 10月2日(火) 18:00 から
大学食堂, 会費 1,500 円で行ないます。
- エキスカッション 10月4日(木)~6日(金)
10月5日午後 3:30 頃盛岡で解散予定
秋田駒ヶ岳, 玉川温泉, 後生掛, 八幡平地熱発
電所など。費用 2,500 円(宿泊料を含む)
- 参加登録費, 講演要旨集, 「黒鉱鉱床の地球化学」に関
するプレプリント代
登録費 500 円(学生 300 円)
要旨集代 1,300 円(予約)
1,800 円
プレプリント 1,000 円
- 討論会世話人連絡先
〒010 秋田市 手形学園町秋田大学教育学部
地学教室 椎川 誠
(Tel. 0188-33-5261 内線 651)

地球化学討論会場及び懇親会場見取図
(秋田大学教養棟2号館を中心として)



主な目印: 天体ドーム, 図書館
デンワボックス, 池

A, B, C: 講演会場

1, 2, 3: 控室

OF: 事務局

会場案内図は会場入口にもあります。

交通

バス: 駅前市バス8番乗場から「手形廻り大廻り線」に乗車。

秋田大学前で下車(所要時間7分)

15分毎に運行

タクシー: 駅前から約200円

学会事務所 (166) 東京都杉並区高円寺北4-35-8
気象研究所 地球化学研究部
電話 (03) 337-1111 内線 75
振替口座 東京 38679
日本地球化学会

ニュース (213) 川崎市高津区久本135
発行所 地質調査所 地球化学課
電話 (044) 86-3171
(編集担当) 倉沢 一・本島 公司
(年5回発行予定)

日本地球化学会ニュース

No. 67

1973. XII. 1

1973年度総会報告

地球化学討論会開催期間中の1973年10月2日, 秋田大学教育学部において, 梅本春次氏が議長となり, 会員約80名出席のもとに総会が開催された。

1. 1973年度事業中間報告

1-1 会員現況

	正会員	賛助会員	名誉会員	計
1972年12月末	711	19	1	731
1973年 入会	28	3	0	31
10月現在 退会	12	2	0	14
1973年10月現在	727	20	1	748

1-2 委員会等開催数

	回		回		回
総 会	1	財 政	1	環 境	3
討 論 会	1	行 事	3	将来計画	5
評議員会	5	編 集	3	選挙管理	2
例 会	3	UMP・GDP	3		
講 演 会	2	極 地	1		

○総会

1973年10月2日, 秋田大学教育学部で開催

○討論会

1973年10月1日~3日, 秋田大学教育学部で開催(秋田大学が世話, 4日~5日エクスカーション)

課題討論Ⅰ 黒鉱鉱床の地球化学(10月3日)

課題討論Ⅱ 有機性鉱床の地球化学(10月1日)

○評議員会

1973年2月10日 東京, 学士会館本郷分館

4月14日 //

6月9日 東京大学海洋研究所

10月1日 秋田大学本部

12月8日 名古屋で開催予定

○例会

1973年2月10日 東大理・化学教室

南極の塩湖とドライバレー深層掘削計画(DVDP)

について 千葉工大 鳥居鉄也

ドライバレー地域の塩湖の地球物理学的研究

京大理・地物研 由佐悠紀

ドライバレー地域の塩湖の地球化学的研究

公衆衛生院 山県 登

1973年6月9日 東大海洋研究所小講義室

海水中の炭酸ガス平衡分圧の測定

名大水質研 金森 悟

海洋における窒素代謝

東大海洋研 服部明彦

1973年12月8日 名古屋で開催予定

○講演会

1973年7月21日 東京学士会館本郷分館

New evidence on the origin of solar systems.

Univ. Calif., San Diego J.R. Arnold

1973年11月10日

The abundances of the elements.

Univ. Calif., San Diego Hans E. Suess

1—3 1974～75 年度役員選挙結果

会 長：小穴進也（次）野口喜三雄

副会長：本田雅健（次）北野 康

評議員：

北海道：室住正世 （次）角皆静男

東 北：斎藤一夫 （次）椎川 誠

関 東：半谷高久，三宅泰雄，倉沢 一，鳥居鉄也，猿橋勝子，菅原 健，山県登，小沼直樹，綿拔邦彦，長沢 宏，立見辰雄（次）杉浦吉雄，杉村行勇，坪田博行，小嶋 稔

中 部：金森 悟，半田暢彦，坂野昇平，寺田喜久雄（次）北野 康

近 畿：桑本 融（次）藤永太郎

中国・四国：松井義人（次）酒井 均

九 州：梅本春次（次）鎌田政明

以上の各氏が選出された。

1—4 名簿の発行

1973 年 8 月に作製，会員に配布した。

1—5 ニュースの発行

No. 63, 64, 65, 66, 67 発行部数1,000 部，合計 24 頁

1—6 会誌発行

欧文誌 Vol. 6, No. 2, 3, 4, Vol. 7, No. 1, 2

論文 19, ノート 8, 289 頁，部数 1,100 部

Vol. 7, No. 3 が年内発行予定

和文誌 Vol. 6, 40 頁，1,000 部年内発行予定

1—7 学協会の共催

1973 年 4 月 第 10 回理工学における 同位元素研究
発表会（東京）

以上事業中間報告が行なわれた。

2. 1972 年度会計決算報告

ニュース No. 64 に報告したように決算報告が行なわれ承認された。

3. 1973 年度会計中間報告

別掲（3 頁）のように報告された。

4. 1974 年度事業計画

4—1 総 会 1974 年秋

4—2 討論会 1974 年秋に，学習院大学が世話役となり，東京で開催予定

4—3 例 会 3 回，講演会 1 回

4—4 評議員会 5 回

4—5 会誌の発行

欧文誌 Vol. 8 200 頁 1,100 部

和文誌 Vol. 8 40 頁 1,000 部

4—6 ニュースの発行

5 回，No. 68～72 24 頁 1,000 部

以上事業計画が承認された。

5. 会則の一部改正

会則第 6 条の改正が承認された。

新	旧
第 6 条：会員はつぎの種別に従って会費をその年度の 6 月 30 日までに納入しなければならない。ただし特別の場合にはこれを減免することができる。	第 6 条：会員はつぎの種別に従って会費をその年度の 6 月 30 日までに納入しなければならない。ただし特別の場合にはこれを減免することができる。
正 会 員 年額 2,600 円 （ただし在外会員は 13 米ドル相当額）	正 会 員 年額 2,000 円 （ただし在外会員は 10 米ドル相当額）
賛助会員 1 口 10,000 円 とし 1 口以上	公共会員 年額 3,500 円 賛助会員 1 口 10,000 円 とし 1 口以上
名誉会員 会費は徴収しない	名誉会員 会費は徴収しない

6. 1974 年度予算計画

別掲（3 頁）のように 1974 年度 予算計画が 承認された。

7. 討 論

会員より，会の財政に関する情報を，値上げの提案前に発表してほしいとの要望があり，評議員会では善処するとの回答があった。

1973 年度 (1973.1.1～1973.12.31)

会 計 中 間 報 告

(1973 年 8 月 31 日現在)

収 入	'73 年度予算
前年度よりの繰越金	2,757,170 円 620 千円
正 会 員 費	895,347 1,200
賛 助 会 費	70,000 200
購 読 料	395,680 950
別 刷 代	168,351 800
広 告 代	27,000 150
刊 行 補 助 金	0 100
利 息	16,511 0
合 計	4,330,059 4,020

支 出	'73 年度予算
会 誌 印 刷 費	894,670 円 2,400 千円
ニュース印刷費	77,000 120
郵 送 料	176,535 350
人 件 費	291,909 350
編 集 費	30,000 60
討論会補助金	70,000 70
委員会活動費	0 20
会 場 会 議 費	45,242 100
講 師 謝 礼	14,000 20
事 務 費	22,720 150
会 員 名 簿 代	385,000 230
銀行等手数料	26,565 50
同位元素研究発表会協賛金	2,000 (予備費)100

合 計 2,035,641 4,020

差 引 残 高 2,294,418

内 訳：

銀行預金	2,081,056
郵便振替	190,985
現 金	22,377

合 計 2,294,418

1974 年度 予算計画

収 入	千円
前年度繰越金	0
正 会 員 費	1,738
賛 助 会 費	100
購 読 料	1,252
超過頁代別刷代	1,040
広 告 料	150
刊 行 補 助 金	270
合 計	4,550

支 出	千円
会 誌 印 刷 費	2,600
(別刷代込みで 400 千円×1.3×5 回)	
ニュース印刷費	160
郵 送 料	450
人 件 費	420
編 集 費	60
討論会補助金	100
委員会活動費	20
講 師 謝 礼	20
会 場 費 会 議 費	120
事 務 費	200
名 簿 代	0
銀行等手数料	50
予 備 費 (名簿代積立金) 20 万円を含む	350
合 計	4,550

会費購読料の変更について

1973 年 10 月 2 日の総会において，会則第 6 条改正が承認され，それに伴い，1974 年度以降の会費・購読料を下記のように変更します。

	国内	在外
正 会 員 費	2,600 円	3,200 円 (13 米ドル)
購 読 料 (1 部)	1,300 円	1,900 円 (8 米ドル)

水圏科学研究所 (Water Research Institute) の創設について

1957年、1部門が創設された、名古屋大学理学部附属の水質科学研究施設は、その増設されて5部門になりました。1973年4月1日から、これが理学部を離れ、名古屋大学付置の独立の水圏科学研究所として発足することになりました。しかし、議会における筑波大学法案との一括討議ということで、研究所化は一時宙に浮き、やっと9月29日にその実現をみました。研究施設時代から一貫して、地球上の水の循環とそれに伴う物質ならびにエネルギーの循環・変化の研究を行なっていました。この線にそった今迄の研究、調査活動は、地球を理解する上で、大変有効であったと思われます。またそれは現在重大化している地球規模の汚染による環境変化の研究の基礎として、重要な意味をもつものでもあると思っております。

研究所に昇格しましたが、従来からあった大気水圏無機化学、大気水圏有機化学、水圏物理学、降水物理学、水圏物質代謝の5部門はそのまま、部門増は全く有りませんでした。おそらく日本で最も小規模の研究所でしょう。ただ事務部門には事務長、係長をはじめとして、若干名の増員がありました。ここでは、従来と同様に理学研究科の地球科学第2類(大気水圏科学課程の大学院)を受け持つ形になっております。

研究所化に至るまでの途は、決して坦々たるものではなくて、その実現に対しては終始頭と神経を使ってまいりました。そして実に色々なことを経験してまいりました。私個人はその努力を16年間続けてまいりました。特に最近の数年間の経験は1つ1つ忘れられません。地球化学に関連する研究所、講座、部門の新設、増設は、地球化学の進歩にとって欠かすことのできない重要な仕事であります。私のいる小さな研究所も、9部門迄には拡張したいと思っております。それらに対して私どもの経験したことが役にたつだろうと私は思っております。もし、必要とされるならば、いつでも私どもの経験してきたことをお話しする心算です。

ともあれ、やっと研究所になりました。機会があったら、是非おたちより下さいまして、私どもの語りあいの一刻をお持ち下さいませよう、お待ち申し上げます。(北野 康)

有機地球化学談話会の発足について

地球上における有機化合物の挙動、あるいはそれを通して地学的諸問題を明らかにしていこうとする研究は国際的にも年々活発になってきた。特に、アメリカ地球化学会のヨーロッパ支部が主催する有機地球化学討論会は回を重ねて、今秋のフランス石油研究所で開催されるものが第6回にあたっている。この間、日本からも地学、地球化学関係の研究室から10編近い論文が発表されている。しかしながら、国内での研究発表は所属する学会の枠内にとどまる場合が多く、かなり似かよった内容の論文でも同時に同じまな板の上に乗せられて議論される機会はほとんどなかった。このような状況から判断して、有機化学物の地球化学にたずさわる研究者の研究連絡の緊密化と研究業績の相互批判を志向する集りを持つことは将来の有機地球化学の発展にとって極めて有意義なものであると云う考え方は何人かの人によってもたれてきていた。

昨年秋、宮城教育大で開催された地球化学討論会の折に、この問題に特に関心の深い地球化学会員の方々(約10名)が集って、出来るだけ早い機会に地学および関連の学問分野の方々と協力して有機地球化学に関する談話会を持つことが望ましいと云う結論が得られた。この集会では地学関係の方々の出席者が少なかったため、この方面の方々からの意見を聴取することは出来なかった。したがって今春東北大学で開催された日本地質学会第80年会の折、夜間小集会を開き、主に地学関係の方々から談話会設立に関する議論をしていただき、幸いにも賛同が得られた。そして地球化学、地質学の分野ならびに関連する学問分野の有志によって今秋の秋田大学での日本地球化学討論会開催時には小集会をもつことができた。

現在希望されている活動は、大体年1~2回(地球化学討論会、地質学会開催時)の談話会の開催と年1~2回の情報交換の広場としてのニュースの発行等である。

以上の点に御理解あって、本談話会のため、地球化学会員諸氏の御協力と御批判をたまわりたい。

なお、本談話会の事務連絡その他の取りまとめは下記の通りである。不明な点はお問合せ下さい。

地学関係 田口一雄 東北大、理、岩鉾

〒980 仙台市青葉山

地球化学関係 半田暢彦 名大、理、水研

〒464 名古屋市千種区不老町

(その後の活動情況は追ってまたお知らせいたします。編集担当)

地化将委新聞

No. 8. 1973年10月
将来計画委員会発行

Letters from Overseas

小田切氏の理論と地球化学

アーカンソー大 E.K. Kuroda

昭和十五年頃私が東京で割手をして居た時に京都から小田切瑞穂さんという方が研究室に見えて地球化学の将来その他について色々意見を述べられたことを今でも記憶して居る。小田切さんは当時元素の起源に関する大論文を書いて日本化学会誌に投稿して居られた。小田切氏の理論は地球内部に核反応の場があってそこで原子核反応が起り、合成された元素が後に地殻を形成するというものであった。その後の戦時中の数年間私は温泉水中のラドンや微量成分の定量などをして、小田切理論のことは忘れかけて居た頃敗戦となった。

昭和二十年八月中旬の或る日広島で原爆の威力をまざまざと見せつけられた時、私はふと小田切さんの言っていた地球内部の元素合成の場はこれだと気がつき、一生かゝってもこの問題の解決にあたってみよう決心した。昭和二十四年に渡米し昭和二十六年に日米和平条約の調印となり、幸いにしてアーカンソー大学の化学教室の助教授にやとってもらうことになった。教室主任教授のエドワーズが小田切さんと全く同じようなことを考えて居り、彼の支援の下に地下におけるウランの核連鎖反応の研究に着手したが、当時エドワーズの考えも一般に評判が悪く、アメリカの学会でも一種の笑い物になっていたことは事実である。

昭和三十年頃になると原子炉に関する書物も出版され、フェルミの理論による計算が容易にできるようになった。現在のウラン

鉱物中の U^{238} の天然核分裂の速度と、天然中性子による U^{235} の核分裂の速度の比を、数億から数十億年以前にもどして計算すると、その当時の U^{235} の濃度が現在よりずっと高かったはずであるから、ウラン鉱床は天然原子炉に近づいたという結論がでる。シカゴ大学の連中はしかしながらウラン鉱床はクリティカルな原子炉にはならなかったという立場を取った。これに対して私は昭和三十一年に或る条件下に天然原子炉はクリティカルになったと主張してシカゴ大学の連中と対立した。

この論争の勝負は実験で決まる筈である。天然原子炉が動いて居たなら天然鉱物中の U^{238}/U^{235} 比が変動すべきであるが、その比の精密測定に関する多数の報告がその後十数年間変動全く無しという結論となったので、この論争は明らかに私の負けとなり、お蔭で私の天然原子炉説も一つの笑い話に終わった様に見える。

ところが昭和四十七年になって状況は完全に逆転する。それはフランスの原子力研究所の連中により、 U^{238}/U^{235} 比の大異常と安定核分裂生成物の天然ウラン鉱における濃縮の発見がアフリカのオクロ鉱山の試料について報告されたからである。

老子の四十一章に「笑はれざれば以て道と為すに足らず」という一句がある。小田切理論に就いて私の天然原子炉説も一時は笑い物になったが、どうやら根本の考え方は老子の言う道に通じて居たらしい。

一枚の絵

シカゴ大学 早津 了一

ここに何の変哲もない絵がある。烈しい雷雨にさらされている。はげ山と海、そし

て太陽からの光線(科学的に重要なのは紫外線部分だが)が付け加えられている。これが或る人達にとっては金科玉条とも言える大変な絵なのである。大気をメタン、アンモニア及び水にすれば、Miller-Ureyモデルによる地球創成期の有機物の起源図になるからである。実際に、幾つかのグループは、有機物の“起源”に関するこの絵は、本当は連続巻の後半に位するのではない、という疑問を抱いていた。しかし、大方は、何らの疑いもためらいも持たずに、この絵をスタートラインに置いて、原始地球上における有機物、さらには生命の起源の研究を進めて来た。確かに、Miller-Ureyモデルで使われるエネルギーの一つである紫外線は無視出来ない。しかし、原始太陽の温度がしだいに上って赤く光り、やがて黄色に輝き始めたその最初の光が地球を照し始める以前に既に各種の有機物が自然発生的に生成されていなかったのであらうか? 旧約聖書の冒頭に“はじめに神 天地をつくりたまへり 地はかたちなく むなくして やみ 淵[わだ]の面にあり 神の霊 水の面をおほひたりき 神 光あれと言いたまひければ 光ありき”の一節がある。この後に神が生命を創造して行くくだりがあるが、生命の源となった有機物が闇の頃に生成されていても少しも不自然ではないはずである。或る人達、即ち有機化学や生化学、あるいはその近縁の分野を主とした人達の中には、意識的に、あるいは太陽系の誕生と歴史に関する彼等の不備な智識からか、専ら上の一枚の絵を連続物の第一頁としてものを考えて来たようである。熱エネルギーを好む人は、この絵のはげ山から煙を出せば星とした。隕石も我が太陽系の仲間なら、地球もまた一頁である。地球だけを切り離してその有機物の起源を考えても無意味である。地球における有機物から生命の誕生は、たまたま驚くべき全ての好条件を神が与えてくれただけのこと、水星でも金星でも原始惑星の創成期には地球同様に各種の有機物が合成されていたに違いないのである。人間が手に

する物質の中で最も始原的な炭素質コンドライトがこれに関する情報を我々に提供している。

当然の事ながら上述の一枚の絵を起源図とすることに不満や疑問を持つ人達が出て来た。それは天体物理、地球物理、核化学あるいは隕石屋さん達である。彼等はMiller-Ureyモデルに反論し、新しいモデルを提出し、理論的実験的に裏づけをやっていく。私がここまで書いてきた事で一体何を言おうとしているのか? 実は、星間空間分子の飛躍と発展に伴い、隕石や惑星の有機物の起源とも関連した新しい分野“有機宇宙化学”が誕生した事に大きく関係しているのである。既に今年の6月スペインで開催された国際コンフェレンス「生命の起源」でも、まず第一日目に有機宇宙化学と名づけられたコロキウムが持たれた。このまことに茫漠とした学問は、単に有機という名がついているというだけの理由で、もし有機や生化学によって取り扱われるならば、再び一枚の絵の愚を繰返す事は必然である。最も適している特定の既存分野があると考えること自体が妥当でないと思われる。丁度この十数年アメリカで主として生れた中間科学、即ち、生物物理、生物数学、生物無機化学等よりも遥かに広範囲に及んでいるのである。それぞれの分野の人からなる緊密なグループを組まない限りは決して開花しない部門である。アメリカでは協同研究が比較的容易に且巧みに行われるようであるが、それでも誰がチーフになるか、誰が主導権を握るか、とか色々の利害関係が出てくる脆くも崩れ去る例がないではない。

もし日本で有機宇宙化学のような研究室が出来たとしたら? 日本独特の講座制は他の研究室との、あるいは他の大学との間において水ももらさぬ研究組織が出来上がるだろうか? あるいは一講座の中に前代未聞ともいふべき、例えば、教授が天文系、助教授が有機系、助手が地質系の如き体制が出来来る可能性があるだろうか? もしこれらの事がなくして同一系流の人達によって作り

上げられた有機宇宙化学研究室ならば筆者はこの分野が日本に誕生しないことを深く念願するのである。再び一枚の絵の愚を繰返すだけである。そして、外国で発表される論文を道いかけ、いくつか出されているモデルも全て不消化に吸収し、その結果なんと“ぬえ”的研究成果が出る恐れがある。事実今までも有機、生化学系の人々(アメリカ、日本等を含めて)により書かれた有機物の起源や化学進化の単行本や総説や論文の中には初歩的熱力学の誤りや、又、既に捨て去られた古い隕石起源のモデル、あるいは、御当人自身どんな説を持ちまた支持しているのか判らぬような文章が堂々と記述されていたりする。他方、天体物理屋さんの書いた有機物に関する章にはリービッヒが泣き出すような所もある。どんなに優れた人でも、一個人ではどうにもならない理化学者が飛躍している事を常に心にためなければならぬ時代に我々は入り込んでいるのである。

素朴な楽天主義

(IAEA,モナコ) 深井 麟之助

“地化将委新聞”なる奇妙な名前の新聞が配達され始めてから、色々な方々の御意見に紙上で接する機会が与えられ、大変興味深く読ませて頂きました。日本を離れてから10年以上の歳月が経過し、その間言語障害も手伝って、自分もいわゆる地球化学者の端くれであり、また環境問題とも無縁でないにもかかわらず、地球化学の将来とか、環境問題の如何に取組まねばならぬかというような、少々哲学的で面倒臭い問題は日頃深く考えたり議論したこともなく、紙上で拝見した多くの御意見に大いに啓発される所がありました。これらの御意見に刺激されて自分を振返って見ますと、全くだらしない限りで、地球化学の将来について発言するなどという大それた野望を持つ状況ではないのですが、隔離状態にある一會員の心理状態というものも多くは會員にとって一興だと思しますので、その感想の一端を御披露に及ぼうと思います。

将来を考える場合に過去と現状の分析と

反省から出発するのは常道で、この中、日本の地球化学の生い立ちについては、本誌No.4に小沼氏の引用された都城氏のすぐれた指摘があり、当時その背景分析の正確さに驚嘆した記憶があります。しかしその発達過程の功罪を評価するとなると意見の分れる所で、このような生い立ちが地球化学の正道を踏み外し、日本における岩石学の発達を阻害したという指摘は正確でしょうが、他面、鬼子ながら個性ある成長をしたと見ることもできましょう。何れにせよ、これは臆測にすぎませんが、日本の地球化学の大勢は10年前と大して変わっていないのではないかという印象を受けます。学会の将来がどのような方向をとるかということは今後徐々に明らかになって来ることを考えますが、それに関連して最も気がかりなことは、都城氏だけでなく他に何人かの方々が述べて居られるように日本の地球化学会が開鎖的集団を形成しているという指摘です。恐らく紙上に述べられた不満や悲観はこの所に根ざしているような気がします。私が海以外のことはさっぱり分らないにもかかわらず、種々の学会に属しているのは、学会誌の購読は別として、学会には色々な意見を持ち、異なった研究対象について種々の経験を積んだ多くのウルサ型が雑然とバン居しており、自分の仕事を種々の観点から批判し、新しい視点を与えてくれるのではないかと期待からに他なりません。こういう観点から見れば、今の地球化学会にとって最も必要なのは、実は、現状に不満を持ち、悲観的になっている人々で、こういう人々をエクスクルーードする方向に進めば、上述のメリットが失われ、学会は自然消滅の方向に向うでしょう。

話は違いますが、私は生来他人の御意見には直ぐ感心してしまう傾向が強く、ローマ法皇の説教でも、毛さんの講話でも、全くごもっともと感心するのですが、いざ実行の段となると、不満者の常として御教旨は期上げしてしまうこととなります。というのは、私の偏見がもしもせませんが、宗教団体にしる。政治団体にしる。人間はこうあらねばならぬ、社会はこうでなくてはな

(4)

らぬという信条が強すぎて、こちらが洗脳されぬ限り、どうにもつきあいきれないからです。学会は信条の集まりではなく、研究対象をもととしての集まりですから、統一見解を表明したり、圧力団体として成長するのは、閉鎖的になる徴で、かえって害があると考えます。学会のエントロピーというものは大きければ大きいほど良いというのが私の認識です。

私は元来、科学全体を支えているものは、高遠な理想でも深遠な問題意識でもなく、科学者個人々々の研究対象に対する好奇心だと思っています。地球化学の分野でも、私自身その一人である地球化学者大衆（そういうものがあるならば）は、ひよんな機会に地球化学の範囲に入る研究対象に好奇心をそそられ、行きがかり上地球化学に首を突っ込み、行きがかり上学会に属し、また環境問題深刻化のあまりのスピードにオタオタしているというのが実状に近いのではないのでしょうか？しかし、研究対象に対する生き生きとした好奇心が失われぬ限り、地球化学は進歩するし、この結果は、誤りを繰返しながらも何とか生き延びようとしている人類の将来に手をかすことが出来るだろうと期待しているのは客観的にすぎるでしょうか？この新聞が私のような怠惰な地球化学者にヤキを入れる場になれば、大変有益だと思ふのですが。

廃刊の御挨拶にかえて 東京理科大 増田 彰正

私がはからずも——というより、某氏にほがられて——将来計画委員会の委員長というものをやらされる羽目に陥ってから約2年たちました。私にとっては、実にナガア〜イ2年でした。結局最後になったこの号の原稿を印刷屋のAさんに渡し終ったら、私はホッとあんだの溜息をもらすに違いありません。しかし、もし、その時の溜息を高感度のガスクロマトグラフにかけたとしたら、“あんどーる”の高いピーク以外に、identificationの困難ないくつかの小さなピークが検出されることでしょう。

この新聞を野球なみにNo.9まで続け、それを特別企画の廃刊号にしようかという考えは、この数ヶ月私の頭の中を去来していました。しかし、幸か不幸か、このことについて思い惑う必要がなくなったのです。乳版印刷の熟達者Oさんが急に暫く入院することになったからです。Aさんは、「こんな仕事の出来る人は今ではとても少いんです。皆、戦中派の人達です。今の若い人は、こういう根気のいる仕事をいそがるものですから。」といわれた。（私は、それは自然科学者の世界には関係のないことだ、と思いつながら、心にひっかかるものを感じていた。）

とにかく、こんな次第で8号で最終ということになりました。この機会に、当新聞の発行と継続を支持し協力してくれた将来計画委員会の諸氏と、進んで投稿され、あるいは寄稿の依頼に快く応じて下さった多くの方々に深く謝意を表したいと思ひます。また、つたない瓦版ながら、少くとも一部の会員の御愛読をいただけたことを大変嬉しく思っております。“愛読者”と名乗る方達の激励がなかったら、この瓦版屋は一年足らずで店をたぎ、チリ紙交換屋にでも転落？していたかもしれません。

是非一度御寄稿をお願いしようと思つてゐる中に最終号を迎えてしまい、結局登場していただけなかった多くの方々がおられることは、私にとって大きな心残りです。ちょっと考えてみただけでも、G氏、E氏、O氏、C夫人等々。地球化学史に長く残ったかもしれない名エッセイ、あるいは卓説が目の目を見ずに終ったおそれがあるわけでございます。特定のテーマについての特集号を一回しか出せなかったことも少し残念です。

弊店の新聞に挟み込まれてばらまかれた小さな種子が、何時か何処かで芽を出し、地球で小さくとも新しい花を咲かせることがあったら……。そしてある朝、通りすがりの一人の少年が無造作にその花を折って胸にさして行ってしまう——という所で私のメルヘンは終るのです。彼のセーターにはG.C.というイニシャルが入っているように見えました。

No.9続刊を委員会で再検討中。

「水—岩石の相互作用」に関する 国際シンポジウム

名 称 International Symposium on Water-Rock Interaction
共 催 IAGC および Geological Survey Prague
期 間 1974年9月9〜17日
場 所 プラハ
内 容 主として; (1)異なる起源の温鉱泉の区わけの基準 (2)低温における水—岩石の反応 (3)実験研究 (4)水—岩石反応の運動論 (5)活動的な地熱系、岩しょう系 (6)変成環境における反応 (7) 間隙水の地球化学; 続成作用、半透膜現象 (8) 流体組成のコンピューター処理
言 語 英語とロシア語 (要旨は1973年12月1日までに下記へ)
巡 検 二酸化炭素に富む水の見学
連 絡 Dr. Tomáš Pačes : Secretary—General
Geological Survey Prague
Malostranské nám 19
11821 Praha 1
Czechoslovakia

(本島公司)

南極ドライバレー掘削計画(DVDP) の現状

1973年度のDVDPは9月からはじめられている。今期の掘削は、ドライバレーの塩湖に関連する地点に重点がおかれている。また、McMurdo基地に設置されるEarth Science Laboratoryには、日本側から各種の測定機器ならびに岩石薄片作製装置も送られている。

本年10月から来年3月までのaustral summer seasonのうち、10月初旬から12月末までの前半には、中井信之(名大)、大野正一(地質調)、森川日出貴(東工大)、中山紘一の4名が、また21月初旬から来年2月末までは、倉沢一(地質調)、綿坂邦彦(東大)が参加し、掘削試料の整理、調査ならびに測定実験を行なっている。その間、鳥居鉄也、吉田栄夫(広島大)も参加することになっている。また楠宏(極地研)も参加することになっている。アメリカ側から提供されている掘削機械は、ニュージーランドの技術者によって順調に運転されている。このDVDPは、1974年度も続けられる。アメリカ、ニュージーランドの研究者も参加している。なお、来年5月末には、アメリカのワシントン州シアト

ルで、研究発表ならびに計画に関するセミナーが開かれる予定。

評議員会報告(抜すい)

(1973年6月9日(土)、東大海洋研、20名)

(報告)

IAGC加盟に関し、JSC(学術会議)に本会活動状況に関する資料を送った。JSC会長宛に地球化学宇宙化学研究連絡委員会設置の要望書を送付した。

環境問題特別委員会では1976年予定の国際シンポジウム準備委員会をつくった。三宅、菅原両氏参加。国内シンポジウムを事前に開く予定。

海研連ではIDOE参加の具体案を作る方針をきめた。

将来計画委員会委員が文部省に行き、地球化学の将来について学術課長から文部省側の考えをきいた。

UMP・GDP関係として、UMPモノグラフ発行の紹介があった。本号ニュース参照。(6頁)

(議事)

1974年度討論会は学習院大に依頼したいという提案があった。

極地派遣科学者推せんがあった。本号ニュースのDVDPの項参照。

学会財政の現状について報告があり、とくに印刷費の値上りが大きく、会費などの値上げを総会に提案することになった。

1973年10月1日現在、正会員数727名、賛助会員20名、雑誌広告主10名である。

なお、賛助会員の募集を引続き行なっているため会員各位のご協力をお願いしたい。募集方法、要領は学会事務所に問い合わせられたい。

UMP モノグラフ第II部の発刊

国際地球内部開発計画 (UMP) は、1962~70 年に実施され、日本地球化学会でもこれに参加しました。

日本で得られた成果については、UMP 国内委員会の編集によって、“The Crust and Upper Mantle of the Japanese Area, Part I Geophysics” が、1972 年に東大地震研究所からすでに発刊されています。

Part II Geology and Geochemistry の発刊がまわっていましたが、1973 年 6 月に地質調査所から出版されました。この 2 冊で UMP の成果の取りまとめは一応しめくられました。第II部のスタイルは第I部と同じで、その大きさは 260×375×20mm という大型になっていて、総頁数は 176、図表が多く、英文です。

内容は次のようです。

第1章 岩石および火山	17 頁
第2章 地球化学	16 頁
第3章 構造地質	125 頁
第4章 深層ボーリングのための概査	13 頁
(本島公司)	

「Geology of Kuroko Deposits」

の予約案内

日本の黒鉱鉱床 21 論文、地域地質論文 3、独立論文 16 からなる英文総括集が鉱山地質学会特別第 6 号として出版予定で、今年末までに予約募集中です。A-4 版、410 ページ、厚手表紙、上製本の国際版です。価格は一般 6500 円、学生 5500 円、出版後定価は予約価格の 2 割高を予定されていますので、希望者は同学会事務局へ連絡して下さい。なお、配本は来年 4 月予定です。

連絡先 ☎104 東京都中央区銀座 8-5-4

日本鉱山地質学会 電話 03-573-3997

日ソ シンポジウム延期のお知らせ

ニュース No. 65 にてお知らせしました日ソシンポジウムは、ソ連側の都合により、1974 年 2 月 13 日 (水)~17 日 (日)、東京で行なわれることになりました。エクスカーションはそのあと、引続いて箱根・大島が予定されています。問合せは下記へどうぞ。

☎113 東京都文京区弥生 1-1-1

東京大学地震研究所 浅野周三

Tel. (03) 812-2111 (内線 6505)

第11回「理工学における同位元素研究発表会」のお知らせ

主催：46 学・協会 (日本地球化学会をふくむ)

会期：1974 年 6 月 17 日~19 日

会場：国立教育会館 (東京、虎ノ門)

発表申込〆切：1974 年 2 月末日

要旨集原稿〆切：1974 年 4 月 15 日

申込先：東京都文京区本駒込 2-28-45

日本アイソトープ協会内

「理工学における同位元素研究発表会」運営

委員会

詳細は学会事務局に問いあわせて下さい。

九州大学理学部 梅本春次 (本学会評議員) 氏
11 月 11 日に急死されました。謹んで哀悼の意を表します。

学会事務局 (166) 東京都杉並区高円寺北 4-35-8
気象研究所 地球化学研究部
電話 (03) 337-1111 内線 75
振替口座 東京 38679
日本地球化学会

ニュース (213) 川崎市高津区久本 135
発行所 地質調査所 地球化学課
電話 (044) 86-3171
(編集担当) 倉沢一・本島公司
(年 5 回発行予定)

日本地球化学会ニュース

No. 68

1974. VI. 1

お知らせ

1974 年 地球化学 討論会

主催 日本地球化学会

共催 日本化学会

日時 10 月 1 日 (火)~3 日 (木)

会場 学習院大学南 3 号館 (豊島区目白、国電目白駅下車)

内容 課題討論および一般討論

課題討論 「地球化学と環境問題」

講演申込締切 7 月 13 日 (土)

同封の別紙申込用紙 (B5) により申し込んで下さい。講演部門はプログラム編成上変更することがあります。講演、討論時間は 20 分 (一般討論) 以内です。スライドは 35mm に限ります。

「地球化学と環境問題」の課題討論の講演を募集します。またこの課題についての御意見をお寄せ下さい。

講演要旨原稿締切 8 月 10 日 (土)

講演申込を受付次第オフセット用原稿用紙をお送り致します。それに黒インクで清書し、下記にお送り下さい。要旨は一般討論は 1200 字 (原稿用紙一枚) 以内とします。*

参加費 500 円 (学生無料)

要旨集代と共に送金されるか、または会場で当日支払って下さい。

講演要旨集代 1,500 円 (送料共) 予約をされ、9 月 10 日までに送金された方には郵送する予定です。

要旨集予約申込締切日 8 月 10 日 (土)

要旨集は印刷部数を限定しますので、ご入用の方は参加あるいは講演希望の有無にかかわらず、別紙申込書でお申し込み下さい。

総会 10 月 2 日 (水) 午後

懇親会 10 月 2 日 (水) 18 時より学習院大学構内で行う予定。会費 1,500 円 (予定)、当日 12 時までにお支払い下さい。

申込書、要旨集原稿、予約金送付先

☎171 豊島区目白 1-5-1 学習院大学理学部

木越邦彦 (電 (03) 986-0221 内線 482)

* 課題討論講演の要旨原稿については別に連絡を致します。

殿	←要旨集原稿用紙の送り先を記入して下さい。切りとって封筒にはりますのでこの部分のうらには記入しないで下さい。	
	1974 年地球化学討論会講演申込書 (〆切 7 月 13 日)	
	受付番号*	講演番号*
	申込者氏名	
	連絡先	郵便番号 電話
	題 演	(200 字以内で裏面に要旨を書いて下さい)
	発表者氏名	(ふりがな講演者に〇印をつけて下さい)
	希望部門	一般討論 課題 (希望講演時間 分)
*印の所は記入しないで下さい。 申込書郵送先：☎171 豊島区目白 1-5-1 学習院大学理学部 木越邦彦		

殿	←郵送希望の方は郵送先を記入して下さい。送金される方は下部の領収書に金額と宛先を記入して下さい。	
	1974 年地球化学討論会要旨集予約申込書 (〆切 8 月 10 日)	
	受付番号	記入しないで下さい。
	氏 名	所属
	連絡先	☎
	懇親会	出席 欠席 どちらか消して下さい
	送金額	2,000 円 1,500 円 なし 要旨集は会費 要旨集+参加費 要旨集のみ 会場でうけとる
	受 領 書 要旨集代 1,500 円 1974 年討論会参加費 計 円也領収致しました。 1974 年地球化学討論会 責任者 木越邦彦	